鳥取県教育文化財団調査報告書　109

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長下門前遺跡

２００７

財団法人　鳥取県教育文化財団

鳥取県教育文化財団調査報告書　109

一般国道181号(岸本バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長下門前遺跡

正誤表

頁	訂正箇所	誤	正
1	第1図	スケールに記載された縮尺率	スケールは正しいので、縮尺率を消去
7	第4図	スケールに記載された縮尺率	スケールは正しいので、縮尺率を消去
7	第4図	79泉中峰・前田遺跡	79泉中峰・泉前田遺跡
9	第5図	スケールに記載された縮尺率	スケールは正しいので、縮尺率を消去
12	第7図	スケールに記載された縮尺率	スケールは正しいので、縮尺率を消去

鳥取県教育文化財団調査報告書　109

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長下門前遺跡

２００７

財団法人　鳥取県教育文化財団

序

近年、鳥取県では妻木晩田（むきばんだ）遺跡、青谷上寺地（あおやかみじち）遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、それらの遺跡の調査成果に基づいて当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

遺跡という貴重な情報を秘めた先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

さて、西伯郡伯耆町において一般国道181号（坂長バイパス）の道路改良工事が着々と進められているところでありますが、当財団は、鳥取県からの委託を受け、この事業に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

平成18年度に調査を行った坂長下門前（さかちょうしももんぜん）遺跡では、落とし穴や貯蔵穴など14基の土坑や石鏃などの石器が発掘され、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。

このたび、それらの調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、鳥取県西部総合事務所県土整備局、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成19年12月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　有田博充

例　　言

1．本報告書は「一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」として実施した坂長下門前遺跡の発掘調査報告書である。
2．本報告書に収載した坂長下門前遺跡の所在地は、以下のとおりである。
　鳥取県西伯郡伯耆町坂長字下門前2,023ほか
3．本発掘調査では、6,500㎡を調査した。
4．本報告書における座標は、世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標を、方位は座標方位を用いている。また、レベルは海抜標高である。
5．本報告書に使用した地図は、岸本町（現伯耆町）発行の1/2,500地形図および国土地理院発行の1/50,000地形図を縮小し、加筆して利用した。
6．本発掘調査における遺跡の航空写真、現地における基準点測量および方眼測量と調査前地形測量は業者に委託したものである。
7．掲載した遺構図面は文化財主事または調査員・調査補助員が作成し、文化財主事または調査補助員が浄書を行った。
8．遺物の実測および浄書は文化財主事または整理作業員が行った。
9．遺構および遺物の撮影は文化財主事が行った。
10．発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
11．本報告書の作成は文化財主事が協議して行い、高橋章司が執筆した。
12．現地調査および報告書の作成にあたっては、多くの方々からご指導、ご助言、ご支援いただいた。感謝いたします。

凡　　例

1．遺跡の略称は「下モン」とした。
2．遺物には、すべて遺跡略称および遺構番号を記載している。
3．遺構の略称は下記のとおりである。
　ＳＫ：土坑
4．本報告書における遺物の略称および縮尺は下記のとおりである。
　番号のみ：土器（縮尺：２/３）　　Ｓ：石器（縮尺：２/３）
5．本文中、挿図および写真図版の遺物番号は一致する。

目　　次

序
例言・凡例

第１章　調査の経緯と経過 ・・・

挿表目次

第３章　発掘調査の成果

第１表　石器観察表・・・・・・・・・・・22

第２表　土器観察表・・・・・・・・・・・22

第３表　落とし穴一覧表・・・・・・・・・24

図版目次

カラー図版

１　　ＳＫ11埋土堆積状況（東から）

２　　調査地全景（東南東から）

図　　版

３－１　調査地周辺の地形（１）（南東から）

３－２　調査地周辺の地形（２）（上が北）

４－１　調査地全景（１）（北東から）

４－２　調査地全景（２）（上が北）

５－１　谷部土層堆積状況（１）（南西から）

５－２　谷部土層堆積状況（２）（北東から）

５－３　谷部土層堆積状況（３）（南東から）

６－１　ＳＫ１埋土堆積状況（北西から）

６－２　ＳＫ１完掘状況（北西から）

６－３　ＳＫ２埋土堆積状況（西から）

６－４　ＳＫ２完掘状況（東から）

６－５　ＳＫ３完掘状況（東から）

６－６　ＳＫ４完掘状況（東から）

７－１　ＳＫ５完掘状況（東から）

７－２　ＳＫ６完掘状況（東から）

７－３　ＳＫ７完掘状況（北東から）

７－４　ＳＫ８完掘状況（東から）

７－５　ＳＫ９完掘状況（南から）

７－６　ＳＫ10完掘状況（西から）

８－１　ＳＫ11埋土堆積状況（北東から）

８－２　ＳＫ11完掘状況（北東から）

８－３　ＳＫ13埋土堆積状況（南西から）

８－４　ＳＫ13完掘状況（南西から）

８－５　ＳＫ12完掘状況（東から）

８－６　ＳＫ14完掘状況（東南から）

９－１　縄文土器・土師器

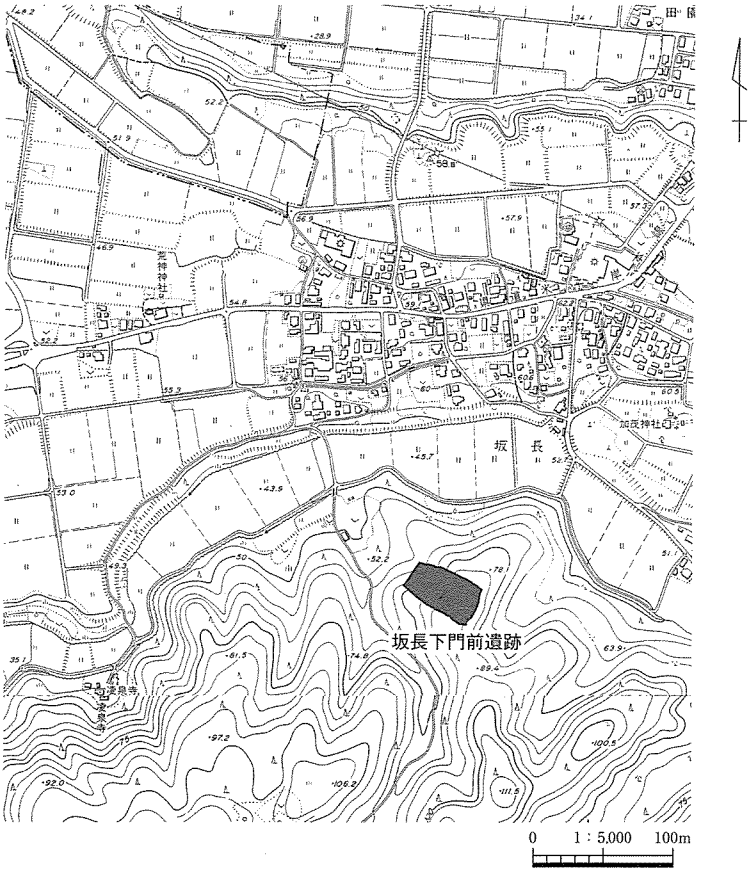
９－２　石器

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

坂長下門前遺跡は、一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴って発掘調査を実施した遺跡である。この遺跡は、鳥取県西伯郡伯耆町地内の道路ルート上に位置し、周知の遺跡ではなかったが、伯耆町教育委員会および鳥取県埋蔵文化財センターによる踏査の結果、地形等からみて古墳時代の集落跡が存在する可能性が想定された。

道路建設工事に先立ち、伯耆町教育委員会が国および県の補助金を受けて平成17年度に試掘調査を実施したところ、ピットおよび陶器片が出土し、遺跡の存在が確認された。この結果を受け、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会事務局文化課は遺跡の取り扱いについて協議を行ったが、現状保存は困難であり記録保存を行うとの結論にいたった。この結論に基づき、鳥取県西部総合事務所長は文化財保護法94条に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出し、事前発掘調査の指示を受けた。そのため、鳥取県西部総合事務所長は発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、当財団理事長が鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法92条に基づく発掘調査の届出を提出したうえで、当財団調査室岸本調査事務所が調査を実施した。



第１図　調査地位置図

第２節　調査の経過

坂長下門前遺跡の調査は、当初計画では８月初めに開始する予定であったが、用地買収等の遅れから調査着手が大幅に遅れ、実際に発掘作業員が稼働したのは10月19日からであった。

調査に先立ち、専門業者に委託して、調査前航空撮影と調査前地形測量を９月中に行った。

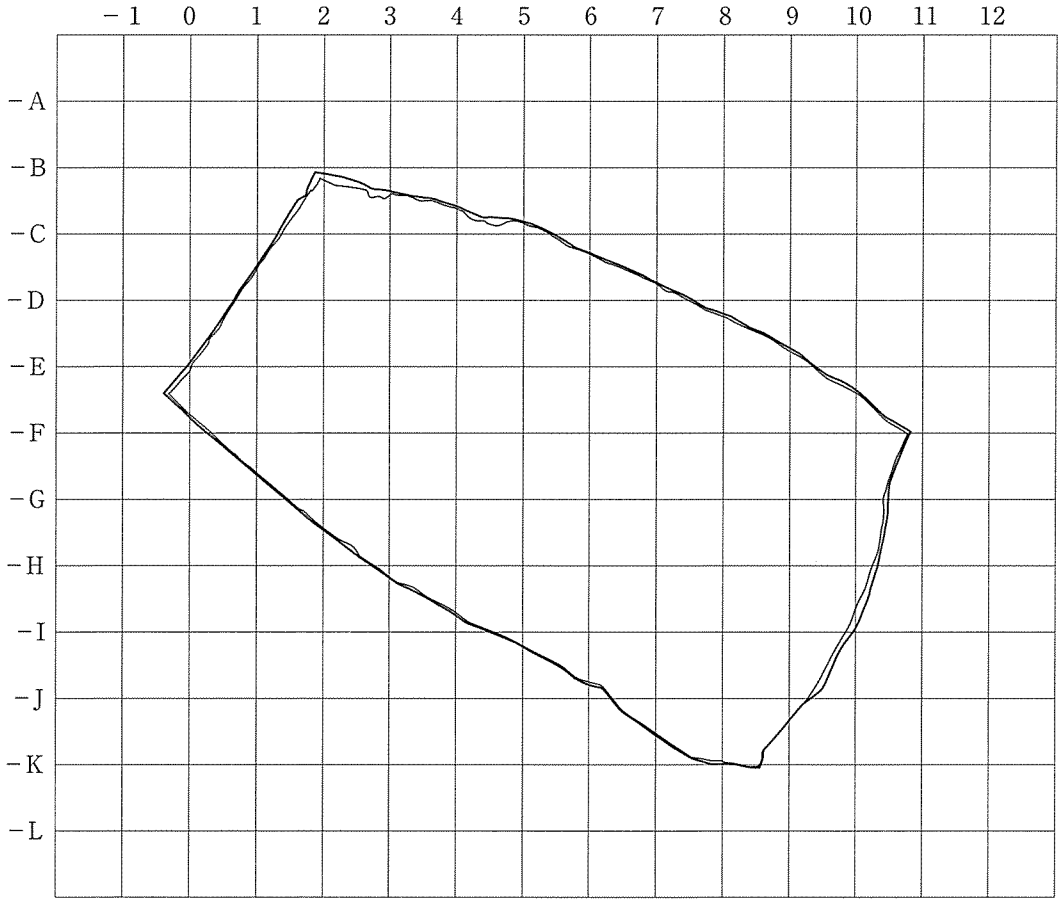
調査地は、東半に南北方向の主尾根（東丘陵部）が、西南側に東西方向の尾根（南丘陵部）が走る。北西端の約６分の１の部分は、比高差10m程度の谷になっている。東丘陵部は、調査前は山林であったが、近年のウド栽培によりほぼ全面が並列する深い溝状の撹乱を受け、地下式のウド室も１基設けられていた。南丘陵部および谷部には耕作の痕跡はなく、山林として利用されていたようである。また、谷部を除いて土層の堆積は薄いうえに締まりの悪い黒色土が主体であり、遺物の散布も皆無であったため、ローム層上面で遺構を検出することとした。

９月14日から９月26日まで、重機によりローム層直上までの表土剥ぎを実施した。

表土剥ぎ後、測量業者に委託して、４級基準杭と公共座標第Ｖ系に基づく10m間隔の方眼杭を打設した。方眼軸には、北から南にアルファベットを、西から東に数字を付し、方眼の呼称は、例えばＣ２というように北東角の杭で代表する。

発掘作業員による掘り下げはまず東丘陵部から行い、ウド栽培による撹乱土を除去しながら遺構を検出した。木の根跡が多数確認されたため、落とし穴等の遺構と区別するために、検出作業が終わった部分から適宜半裁を開始した。次いで南丘陵部も同様に調査を進めた。

東丘陵部のＥ９区において、旧石器時代の遺物の可能性がある黒曜石製の石器が出土した。



第２図　調査区グリッド図

そのため、Ｅ９区とＦ９区に一辺２ｍのグリッドを複数設定し、ハードローム層上部までの掘り下げを行って、旧石器文化層の有無を確認したが、遺物は出土しなかった。

丘陵部の調査がほぼ終了した段階で、谷部の調査に取りかかった。まず、幅１ｍのトレンチを谷の主軸に従って縦横に組み、土層の堆積状況を確認した。その結果、トレンチ内で土坑および縄文土器片が出土したため、全面を人力により掘削した。

12月21日に業者に委託して調査後航空撮影を行い、12月28日にすべての調査を終了した。

○坂長下門前遺跡調査の経過

９月１日　調査前航空撮影
９月１日～９月11日　調査前地形測量
９月14日～９月26日　重機による表土剥ぎ
10月３日～10月４日　基準点測量および方眼測量
10月19日　発掘作業員稼働開始
10月20日　ローム層上面での遺構検出および土坑半裁開始
10月30日　ローム層上面から旧石器の可能性がある石器が出土
11月２日　地形測量開始
11月13日　ＳＫ２から石鏃出土
11月24日　谷部掘削開始
　　ＳＫ１から土師器片出土
11月28日　谷部から縄文土器片出土
12月４日　Ｅ９区およびＦ９区でローム層の掘削開始
12月21日　調査後航空撮影
12月28日　調査終了

第３節　調査体制

調査は以下の体制で実施した。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長　　有田　博充

事務局長　　中村　　登

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室　　長　　久保穣二朗（兼・県埋蔵文化財センター所長）

次長（事務）　　國弘　博之

文化財主事　　西川　　徹

事務職員　　岡田美津子　　船曳　朋子

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室　岸本調査事務所

所　　長　　國田　俊雄

文化財主事　　高橋　浩樹　坂本　嘉和（坂長村上遺跡・坂長道端中遺跡担当）

加藤　裕一　河合　章行（坂長第７遺跡担当）

高橋　章司（坂長第８遺跡、坂長下門前遺跡担当）

調　査　員　　祝原　幸治（坂長第８遺跡、坂長下門前遺跡担当）

○調査協力

財団法人米子市教育文化事業団　西部土地改良区　伯耆町教育委員会

（五十音順、敬称略）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

坂長下門前遺跡は鳥取県西部、西伯郡伯耆町坂長に所在する。

周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸は主に、大山のさまざまな火山噴出物からなる緩やかな台地で、第四紀更新世に形成された。一方、坂長下門前遺跡が位置する日野川左岸は主に、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北８km東西３kmにわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な洪積台地とで構成される。丘陵地帯は、第三期鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山砕屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤とし、上部はやはり大山上中部火山灰で覆われている。この他に、日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19年（1550）と元禄15年（1702）の洪水により、現在のような西寄りの流路になった。

坂長下門前遺跡は、越敷山からのびる丘陵の末端近くに立地し、標高は80m前後である。丘陵の北には、東西方向に谷が走る。この谷は湧水が豊富で、丘陵の直下にはかつて泉が湧き、豆腐小屋が設けられていたという。谷の北側には長者原台地が広がり、多くの遺跡が分布する。

第２節　歴史的環境

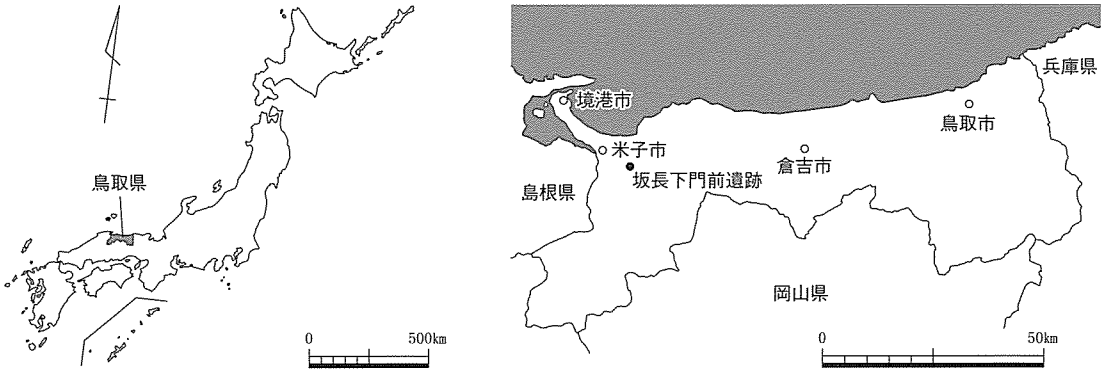
旧石器時代

長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では、ナイフ形石器がローム層中から出土した。２点のナイフ形石器はともに珪岩製で、小型の石刃を二側縁加工したものである。坂長村上遺跡（50）からも、黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。この他に、泉中峰遺跡（79）と小波遺跡（80）からナイフ形石器が出土しているが、石器群が原位置でまとまって出土した例はまだない。

縄文時代

坂長村上遺跡からは、多様な石材と形態の5点の尖頭器を中心とする草創期の石器群が出土した。他に、貝田原遺跡（61）、奈喜良遺跡（20）などで、サヌカイト製有茎尖頭器が見つかっている。

早期後半から、大山西麓では押型文土器を出土する遺跡が多く知られ、上福万遺跡（73）では集石遺構や土坑が多数検出されている。前期になると、中海沿岸にも集落が形成され、目久美遺跡（８）



第３図　遺跡位置図

や陰田第９遺跡（９）では、土器や石器のほか、動植物遺体が豊富に出土している。中期になって新たに出現する遺跡は少なく、後期になると再び増加する。晩期には、古市河原田遺跡（12）をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多く、坂長第８遺跡でも出土している。周辺地域では非常に多くの落とし穴が発掘されていて、妻木晩田遺跡（83）で963基、青木遺跡（22）で228基、越敷山遺跡群（45）で341基を数える。年代の判明したものでは、後・晩期の例が多い。

弥生時代

前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡（８）や長砂第２遺跡（４）などの低湿地遺跡がある。両遺跡では、前期から中期にかけての水田跡が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。この時期の集落は丘陵上にもあり、宮尾遺跡（28）や諸木遺跡（29）では環壕が発掘されている。特に清水谷遺跡（17）の環壕は内部に竪穴住居等をもたない点で注目される。

中期後葉以降は遺跡数が増加し、丘陵上には、妻木晩田遺跡（83）、青木遺跡（22）、福市遺跡（21）など大規模な拠点的集落が出現する。越敷山遺跡群（45）は高い丘陵上に位置する集落跡で、多数の鉄器をもつ。同時期にこの地域には四隅突出型墳丘墓が分布し、妻木晩田遺跡洞ノ原地区・仙谷地区の墳丘墓群や父原墳丘墓群などが代表である。日下１号墓（75）は木棺墓群に、尾高浅山１号墓（76）は環壕集落に隣接して築造されているのが注目される。

なお、当地域では青銅器がほとんど出土しておらず、浅井土居敷遺跡（37）の環状の青銅器や、久古第３遺跡（60）の銅剣の可能性がある青銅器片などを挙げることができるのみである。

古墳時代

主要な前期古墳には、三角縁神獣鏡が出土した前方後方墳と方墳の普段寺１・２号墳（35）、方墳で６基の埋葬施設をもつ日原６号墳（19）がある。当地域において前期に遡る前方後円墳は確認されていない。また、墳丘の規模も20m前後の比較的小さなものばかりである。

中期古墳では、全長108mの前方後円墳の三崎殿山古墳（26）が著名である。他には画文帯神獣鏡が出土した浅井11号墳（36）、宮前3号墳（32）といった小型の前方後円墳が築造されている。

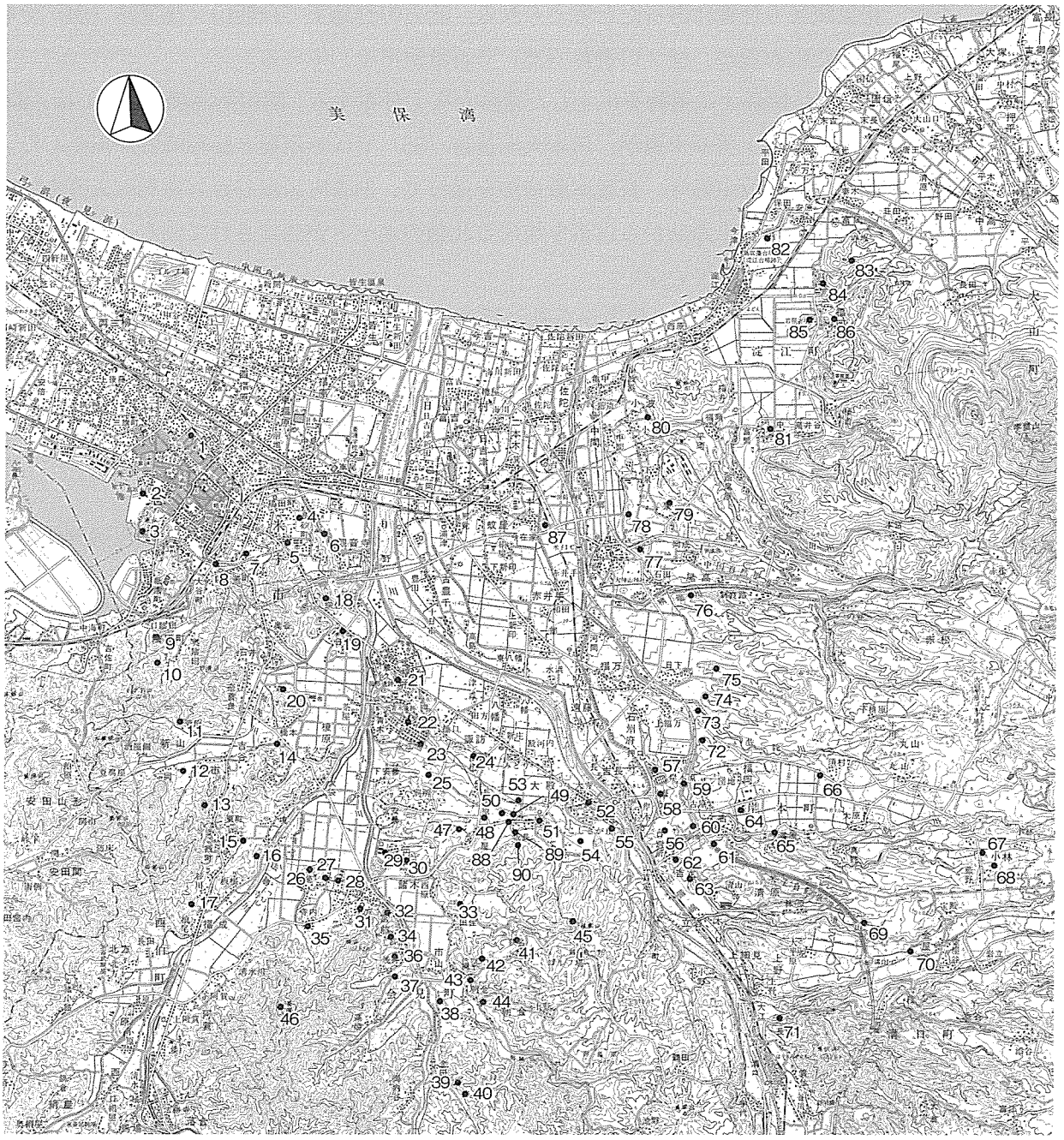
後期に入ると古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。長者原台地上では諏訪古墳群や長者原古墳群（53）などが縁辺部に、丘陵地帯には越敷山古墳群が形成される。吉定１号墳（63）の割石小口積みによる持送り式横穴式石室や、東宗像５号墳（18）の横口式箱式棺などは、九州地方との関連性を窺わせる。終末期には、陰田横穴墓群（９）や日下横穴墓群（75）などの横穴墓が造営される。

この時代の集落遺跡は、主に台地上や丘陵上に分布し、福市遺跡（21）や青木遺跡（22）のように、弥生時代後期から継続して営まれたものが多い。坂長第８遺跡（89）では中期中葉の竪穴住居跡が３棟発掘されていて、付近に比較的規模の大きな集落跡が存在する可能性がある。

古代

白鳳期には、大寺廃寺（52）が創建される。東向きの法起寺式伽藍配置を取り、金堂の瓦積基壇と三段舎利孔を持つ塔心礎が確認されている。石製鴟尾は全国に他に１例しかない。創建時の瓦と同一文様の瓦は金田瓦窯（39）からも出土したという。付近の台地上には坂中廃寺（51）があり、塔心礎が残る。奈良末から平安初めの瓦が散布しているが、伽藍配置等は明らかでない。

『和名類聚抄』によると律令制下において周辺地域は伯耆国会見郡にあたる。長者屋敷遺跡（48）と坂長下屋敷遺跡（49）では大型の掘立柱建物跡が確認され、会見郡衙の施設である可能性が高い。坂長村上遺跡（50）や坂長第7遺跡（88）からも円面硯や刻書土器など、官衙的な性質が強い遺物が



1　錦町第１遺跡
2　久米第１遺跡
3　米子城
4　長砂第１・２遺跡
5　長砂第３遺跡
6　水道山古墳
7　池ノ内遺跡
8　目久美遺跡
9　陰田遺跡群
10　奥陰田遺跡群
11　新山遺跡群
12　古市遺跡群
13　吉谷遺跡群
14　橋本遺跡群
15　福成石佛前遺跡
16　福成早里遺跡
17　清水谷遺跡
18　東宗像古墳群
19　日原古墳群
20　奈喜良遺跡
21　福市遺跡
22　青木遺跡
23　樋ノ口第４遺跡
24　諏訪西山ノ後遺跡
25　別所新田遺跡
26　三崎殿山古墳
27　天萬土居前遺跡
28　宮尾遺跡
29　諸木遺跡
30　後垰山古墳
31　天万遺跡
32　宮前３号墳
33　田住古墳群
34　宮前遺跡
35　普段寺１号墳
36　浅井11号墳
37　浅井土居敷遺跡
38　天王原遺跡
39　金田瓦窯
40　両部太郎窯
41　荻名遺跡群
42　田住松尾平遺跡
43　朝金古墳群
44　朝金小チヤ遺跡
45　越敷山遺跡群
46　手間要害跡
47　荒神上遺跡
48　長者屋敷遺跡
49　坂長下屋敷遺跡
　　大殿下ノ原遺跡
　　諏訪東土取場遺跡
　　坂長米子道端ノ上遺跡
50　坂長村上遺跡
　　坂長道端中遺跡
51　坂中廃寺
52　大寺廃寺
53　長者原古墳群
54　坂中第５遺跡
55　岸本大成遺跡
56　岸本古墳群
57　岸本遺跡
58　岸本要害跡
59　岸本下ノ原遺跡
60　久古第３遺跡
61　貝田原遺跡
62　口別所古墳群
63　吉定１号墳
64　久古北田山遺跡
65　番原遺跡群
66　須村遺跡
67　真野ブナ遺跡
68　藍野遺跡
69　林ヶ原遺跡
70　下山南通遺跡
71　長山馬籠遺跡
72　石州府古墳群
73　上福万遺跡
74　日下寺山遺跡
75　日下古墳群
76　尾高浅山遺跡
77　尾高城
78　尾高御建山遺跡
79　泉中峰・前田遺跡
80　小波原畑遺跡
81　井手脇遺跡
82　今津岸の上遺跡
83　妻木晩田遺跡
84　晩田遺跡
85　向山古墳群
86　上淀廃寺跡
87　今在家下井ノ上遺跡
88　坂長第７遺跡
89　坂長第８遺跡
90　坂長下門前遺跡

0　1：100,000　2km

第４図　周辺遺跡分布図

出土した。なお、相見駅家も付近にあったと考えられる。北方の台地上では西山ノ後遺跡（24）で和同開珎と墨などを納めた胞衣壺が、樋ノ口遺跡（23）で石帯が出土している。

周辺地域には、律令制に関係する遺物を出土した遺跡が広く分布する。陰田遺跡群（９）では「館」「里長」などと記された墨書土器や木簡が、岸本大成遺跡（55）では転用硯と緑釉陶器が出土した。

古代山陰道は、大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡を通って、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されている。ただし、発掘調査による明確な確認には至っていない。

『延喜式』等によれば、古代にはこの地方から鉄が貢納されていたことが知られる。陰田遺跡群や新山遺跡群（11）などでは、製鉄・鍛冶関連の遺構と遺物が検出された。坂長下門前遺跡の周辺でも、坂長村上遺跡や坂長第7遺跡では、多くの鉄滓や羽口などが出土している。

中世

平安時代には各地に荘園が発達し、遺跡周辺は八幡荘に含まれていたとされる。

大山寺の鉄製厨子には、承安元年（1171）の火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山権現御神体と厨子を奉納したことが記されている。伯耆町坂長には紀成盛が居宅を構えたという伝承が残る。

南北朝時代には大寺に安国寺が置かれた。要衝の地であり名和氏などの南朝勢力を抑える目的があったとされる。42坊を数える大寺院であったが、永禄８年（1566）に、杉原盛重に焼き討ちされた。

南北朝から戦国時代の動乱期には、山陰道沿いの要地を中心に、数多くの城砦が築かれた。小波城（80）、尾高城（77）、手間要害（46）は、文献にも登場する代表的な城跡である。このうち尾高城跡では、発掘調査により櫓跡や輸入陶磁器などが出土している。

近世

西伯耆は、吉川広家・中村一忠・加藤貞泰と領主交代を繰り返した末に、元和3年（1617）に、因幡・伯耆32万石を領する鳥取藩の一部として池田光政が領主になる。寛永９年（1632）国替えにより池田光仲が封入すると、周辺地域は藩の直轄領と寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属し、以後明治2年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

坂長村は、明治11年（1878）に、坂中村と長者原村が合併して成立した村である。『伯耆志』の記載によれば、安政頃の坂中村は67戸280人で、長者原村はわずか2戸12人であった。

長者原台地では、石田村吉持家により佐野川用水の開削事業が実施された。事業は元和4年（1618）から数回の中断を経ながら約250年にわたり、文久元年（1861）にようやく完成を見た。これにより、荒蕪地であった長者原台地は水田・畑地となり、現在に至っている。

【参考文献】

地質調査所 1962『５萬分の１地質図幅説明書　米子』（岡山－第18号）
山名巌 1964「山陰地方における第四紀末の諸問題」『鳥取県立科学博物館研究報告』
岸本町 1983『岸本町誌』
会見町 1996『会見町誌　続編』
米子市 2003『新修　米子市史』

第３章　発掘調査の成果

第１節　遺跡の立地と層序

坂長下門前遺跡は、西伯郡伯耆町の西部、越敷山からのびる丘陵の先端近くに位置する。今回の調査地内では尾根が二つに分岐する。一つ目は、北東方向に緩やかに下る、幅約40mの尾根で、東丘陵部と呼ぶ。調査地内の最高所で標高約83mを測る。この尾根は調査地外でさらに分岐してゆるやかな舌状を呈し、その先端には坂長第８遺跡が位置している。二つ目は北西方向に、東丘陵部よりは少し急に下る尾根で、南丘陵部と呼称する。この尾根は調査地を出たところで急傾斜になって終わり、緩やかな谷地形に続く。二つの尾根の間からは、傾斜の強い谷が始まり、この緩やかな谷地形に交わる。これを谷部と呼ぶ。調査地内では、谷部と南丘陵部との比高差は最大で約10mを測る。調査前の状態は、調査地全体が山林であった。東丘陵部は、ほぼ全面が近年のウド栽培により、並列する深い溝状の撹乱を受けていたが、地形を大きく改変するようなものではなく、調査地全面にわたり自然地形が保たれていた。

調査地の基本的な層序は、丘陵部では次の通りである。（第５図）

Ⅰ層：表土。層厚約８cmで遺物を含まない。腐植土。

Ⅱ層：褐色土。締まりが悪い。層厚約10cm。遺物を含まない。

Ⅲ層：黒色土。締まりが悪い。層厚約20cm。土師器片や石鏃をごく僅かに包含する。

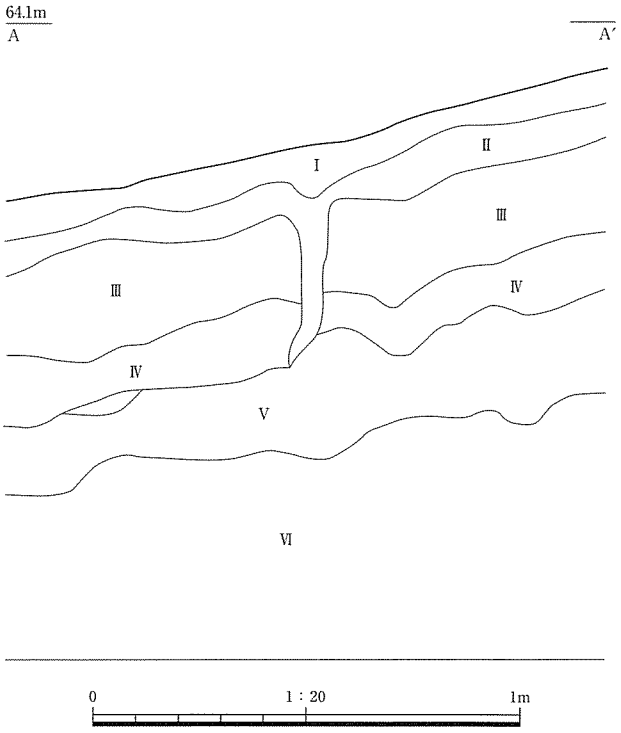
Ⅳ層：灰褐色土。やや粘質。層厚約15cm。遺物を含まない。漸移層。

Ⅴ層：橙色粘質土。層厚約20cm。黄色みを帯びていて、ソフトロームに当たると思われる。東丘陵部では、近年のウド栽培による溝状の撹乱がこの層を深さ15cm程度まで掘り込んでいるほか、調査地全体にわたり、風倒木痕や木の根跡が多く見られる。

Ⅵ層：明褐色粘質土。層厚は50cm以上。赤みが強く、ハードロームに当たると思われる。

Ⅰ層からⅣ層まではいずれも薄く、場所によっては、どれかが欠けていることもある。丘陵上で、雨水の浸食等によって上部が流失することを繰り返した結果と考えられる。

谷部では上層を除いては、丘陵部とは堆積の状況が異なる。それぞれの層が厚く、全体的に粘度が強い。また、丘陵部の土層には含まれない砂粒や小礫が含まれる。これらは、丘陵部から流れ出た土砂が堆積した結果を反映しているのであろう。しかしながら、谷地形の堆積物にもかかわらず、全体の構成は非常に単純で、細かく分層することはできない。



Ⅰ　表土
Ⅱ　褐色土7.5YR4/3　ボソボソ
Ⅲ　黒色土7.5YR2/1　ボソボソ
Ⅳ　灰褐色土7.5YR4/2　やや粘質
Ⅴ　橙色粘質土7.5YR7/6　ソフトローム
Ⅵ　明褐色粘質土7.5YR5/8　ハードローム

第５図　基本層序

谷部の層序は次の通りである。（第６図、図版５）

Ⅰ層：表土。無遺物。

Ⅱ層：褐色土。締まりが悪い。無遺物。

Ⅶ層：黒褐色土。最大で層厚約60cm。やや粘質。土器細片を僅かに包含する。

Ⅷ層：極暗褐色粘質土。最大で層厚約70cmで、砂粒を含む。縄文土器の細片が出土した。

Ⅸ層：明褐色粘質土。層厚不明。ローム層。

第２節　調査の概要

発掘した遺構の分布密度は、全体に非常に散漫である。（第７図）

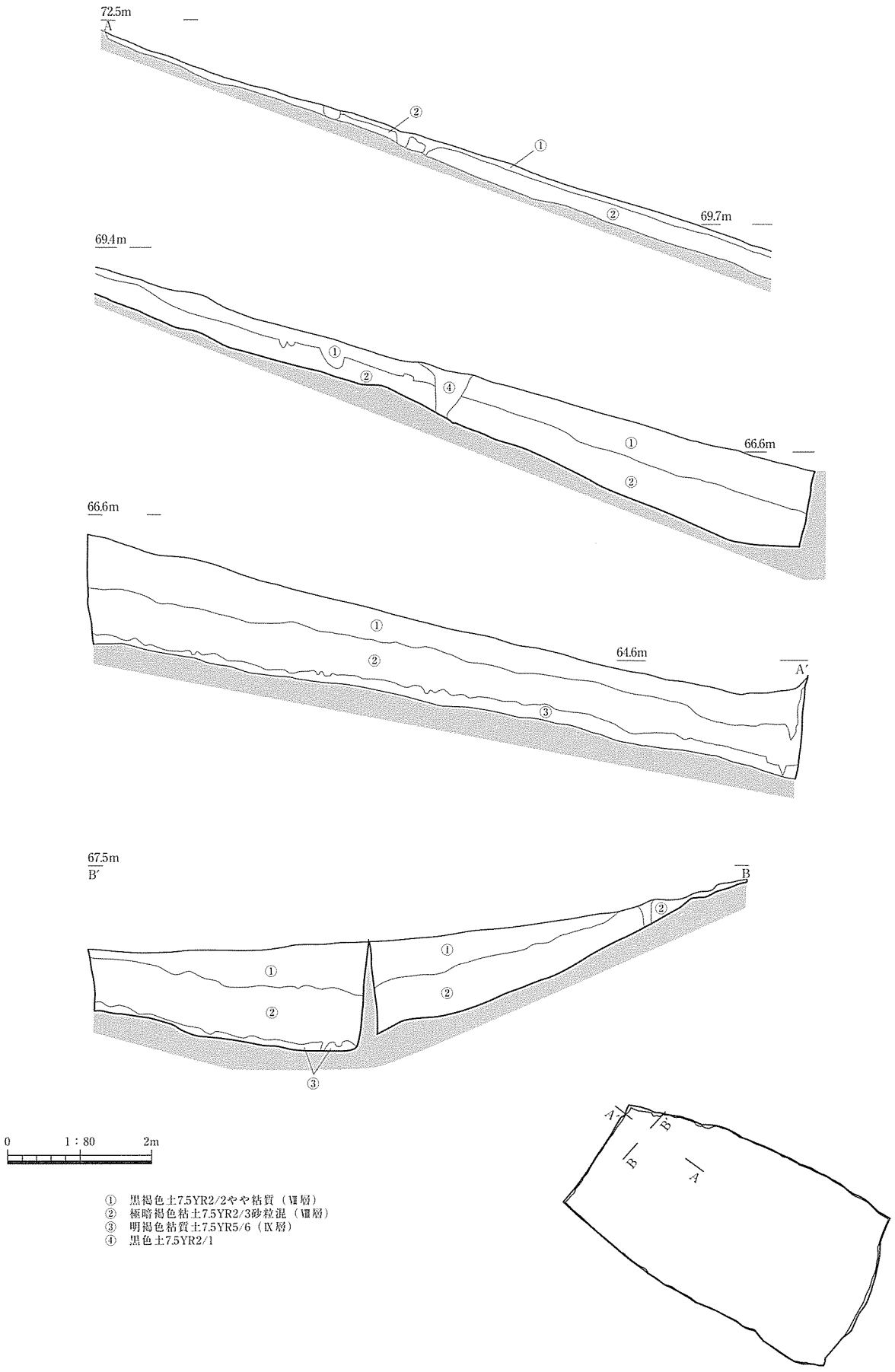
遺構のほとんどは落とし穴と考えられる土坑で、東丘陵部に９基、南丘陵部に１基、谷部に２基の、計12基が分布している。丘陵部のものは、主に尾根筋を中心に、谷部のものは谷の中程に配置されている。丘陵部の落とし穴は、厳密には尾根筋の最高所をやや外れた、やや傾斜の強い場所を選んでいる傾向が認められる。落し穴の分布はある程度はまとまっているものの、各落とし穴間の間隔は広く、また、柵列のような、落とし穴に付帯する遺構は全くなかった。これは、追い込みを伴うような組織的な狩猟のためのものではなく、偶然かかった獲物を目的とするような場当たり的な使用方法を反映しているのかもしれない。地形の選び方が共通しかつ距離が近い落とし穴どうしは、平面形や規模が類似しているので、同時か近い時期に設けられた可能性があり、一群のものとして扱えそうである。少なくとも３群を認めることができる。

落とし穴のうち２つの埋土からはそれぞれ、石鏃と縄文土器らしい土器細片が出土したので、縄文時代のものと考えられる。その他のものも、上部の埋土は締まったものが多く、新しい遺物が出土したものはないので、古い時代に埋没していると考えられることと、群を形成するらしいことから考えると、縄文時代の遺構である可能性が高い。

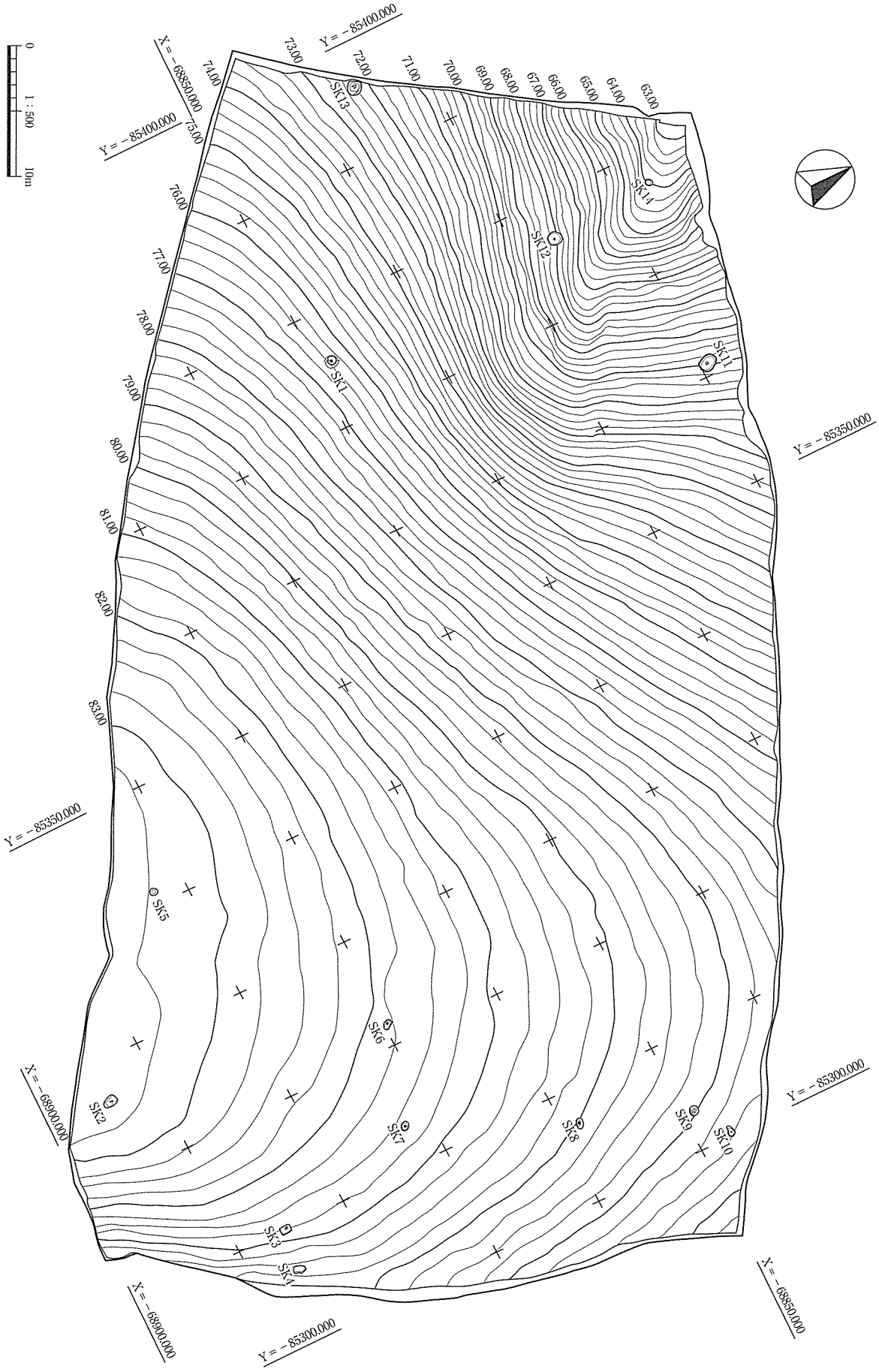
他に、南丘陵部ではフラスコ状の土坑が検出された。埋土中から土師器と思われる土器片が出土したので、古墳時代の貯蔵穴と考えられる。谷部の底からは、おそらく縄文時代のものと考えられる土坑が検出されている。

遺物も、非常に希薄である。土坑埋土から出土したものの他には、縄文土器片２点、土師器と思われる土器片３点、石器２点が出土したのみである。縄文時代の遺物は谷部に、古墳時代の遺物は南丘陵部にまとまっている。隣接する坂長第８遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代前期と、古墳時代中期の２時期に営まれているので、それぞれ関連があるのかもしれない。

東丘陵部では、旧石器の可能性がある石器が１点出土したのみで、土器片は１点も出土しなかった。調査地内で最も平坦で広い部分であり、集落にも近い土地であるが、意外にも、狩猟の場として使われる他には、近年に桐やウドが栽培されるまで、ほとんど利用されることがなかったようである。


72.5m
A
69.7m
69.4m
66.6m
66.6m
64.6m
A′
67.5m
B′
B
0
1：80
2m
① 黒褐色土7.5YR2/2やや粘質（Ⅶ層）
② 極暗褐色粘土7.5YR2/3砂粒混（Ⅷ層）
③ 明褐色粘質土7.5YR5/6（Ⅸ層）
④ 黒色土7.5YR2/1

第６図　谷部土層断面


0
1：500
10m
Y＝－85400.000
X＝－68850.000
Y＝－85350.000
X＝－68900.000
Y＝－85300.000
73.00
72.00
71.00
70.00
69.00
68.00
67.00
66.00
65.00
64.00
63.00
74.00
75.00
76.00
77.00
78.00
79.00
80.00
81.00
82.00
83.00
SK1
SK2
SK3
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14

第７図　遺跡全体図

第３節　遺構と遺物

遺構

ＳＫ１（第８図、図版６）

南丘陵部の緩斜面上に位置し、全体形はフラスコ形を呈している。検出面では円形で径76cm×73cmを測り、底面は楕円形で長径125cm×短径114cmを測る。検出面からの深さは63cmである。断面形は台形で、崩落のため底面側が大きく抉れている。本来は底面と上面の大きさの差はあまりなかったと考えられる。底面中央には径26cm×22cm、深さ10cmの浅い円形の窪みが設けられている。

埋土中から土師器の細片が１点出土した。やや薄く、器形は不明で、文様や調整は見られない。胎土や焼成から、古墳時代のものと思われる。埋土からの出土なので、この遺構に伴うものとは考えにくいが、付近では、Ⅲ層中からやはり古墳時代のものと思われる土師器の細片２点が出土している。

中心に支柱を立てた覆いをもつ貯蔵穴で、古墳時代以前のものと考えられる。

集落から離れた丘陵上に貯蔵穴を設ける理由には、内容物が湿気を嫌う場合などが考えられる。現時点では、丘陵下に位置する古墳時代中期の坂長第８遺跡に関係すると考えるのが妥当であろう。しかし単独で存在することは、理解に苦しむ。丘陵の下から土器片が上がってくることは考えにくいので、あるいは、調査区外南方の高所に、集落または他の遺構があると考えるべきかもしれない。

ＳＫ２（第８図、図版６）

東丘陵部尾根上の平坦面に位置する。検出面での平面形は長楕円形で、長径130cm短径85cm、底面は108cm×57cmの長方形で、深さは91cmを測る。底面の形態から考えると、検出面が長楕円形を呈するのは崩落の結果で、本来は長方形であったかもしれない。埋土にローム塊が多く含まれていることからも崩落の程度が大きいことが窺われる。底面中央に、径５cm、深さ15cm前後の小ピットが３基、対角線方向に並んでいる。３本の細い杭を直接打ち込んだ痕跡と考えられる。

検出面から約20cmの深さで、鉄石英製の石鏃が１点出土した。凹基の石鏃で、脚部は丸みを帯びる。両側縁は押圧剥離により丁寧に鋸歯状に仕上げる。先端を僅かに欠損するのは、使用の結果であろう。赤木三郎氏のご教示によれば、鉄石英は在地石材で、南東に約12km離れた伯耆町日光小学校近くに露頭があるという。当地域では弥生時代にはほとんど使われない石材であるので、縄文時代のものと考えてよいだろう。埋土上部からの出土のため、埋没の過程で混入したもので、ＳＫ２と同時に使われたものとは考えにくい。ただし、落とし穴の覆いや杭や壁面に矢が命中した状態で残された場合には、同時使用でも埋土上部に含まれることがありうるかもしれない。縄文時代の落とし穴である。

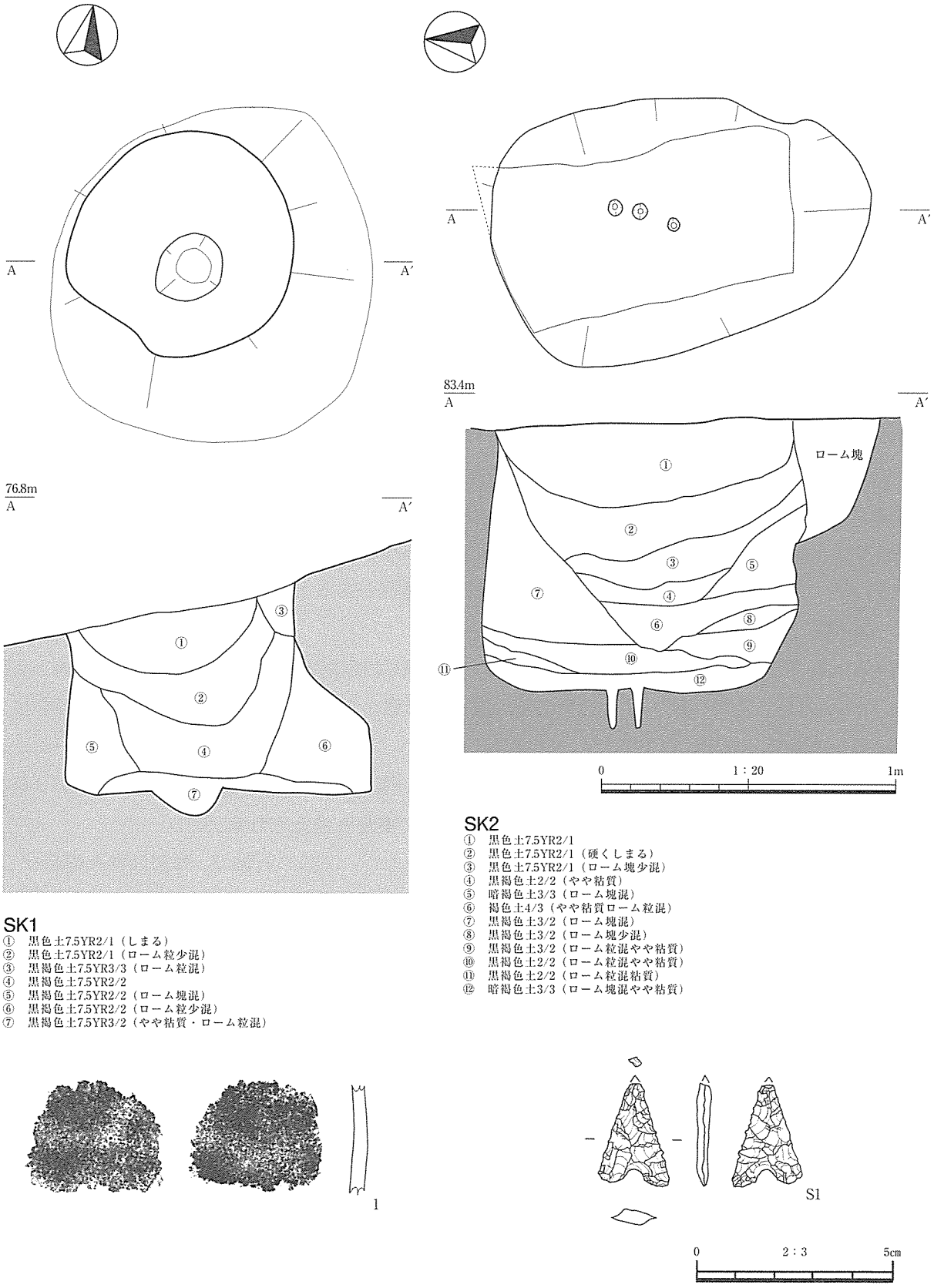
ＳＫ３（第９図、図版６）

東丘陵部の、丘陵肩部緩斜面に位置する。検出面での平面形は98cm×62cmの長方形で、深さ82cmを測る。底面ピットは底面中央を少し外れた位置に１つあり、土坑底面では25cm×20cmの長方形だったものが最深部では径17cmの円形となる。底面ピットの深さは60cmを測り、非常に深い。底面ピット内及び周辺からは、杭痕跡や、粘土や石などの杭を据えるための施設は確認できなかった。何本の杭を据えていたものかは分からないが、最深部が円形であることからすると、１本であろう。

遺物は出土していないが、ＳＫ２と位置が近いことや、規模と平面形が類似することから、一群のものと考えられる。縄文時代の落とし穴であろう。

ＳＫ４（第９図、図版６）

ＳＫ３から約４ｍ下った緩斜面に掘られている。検出面での平面形は104cm×59cmの不整な長方形



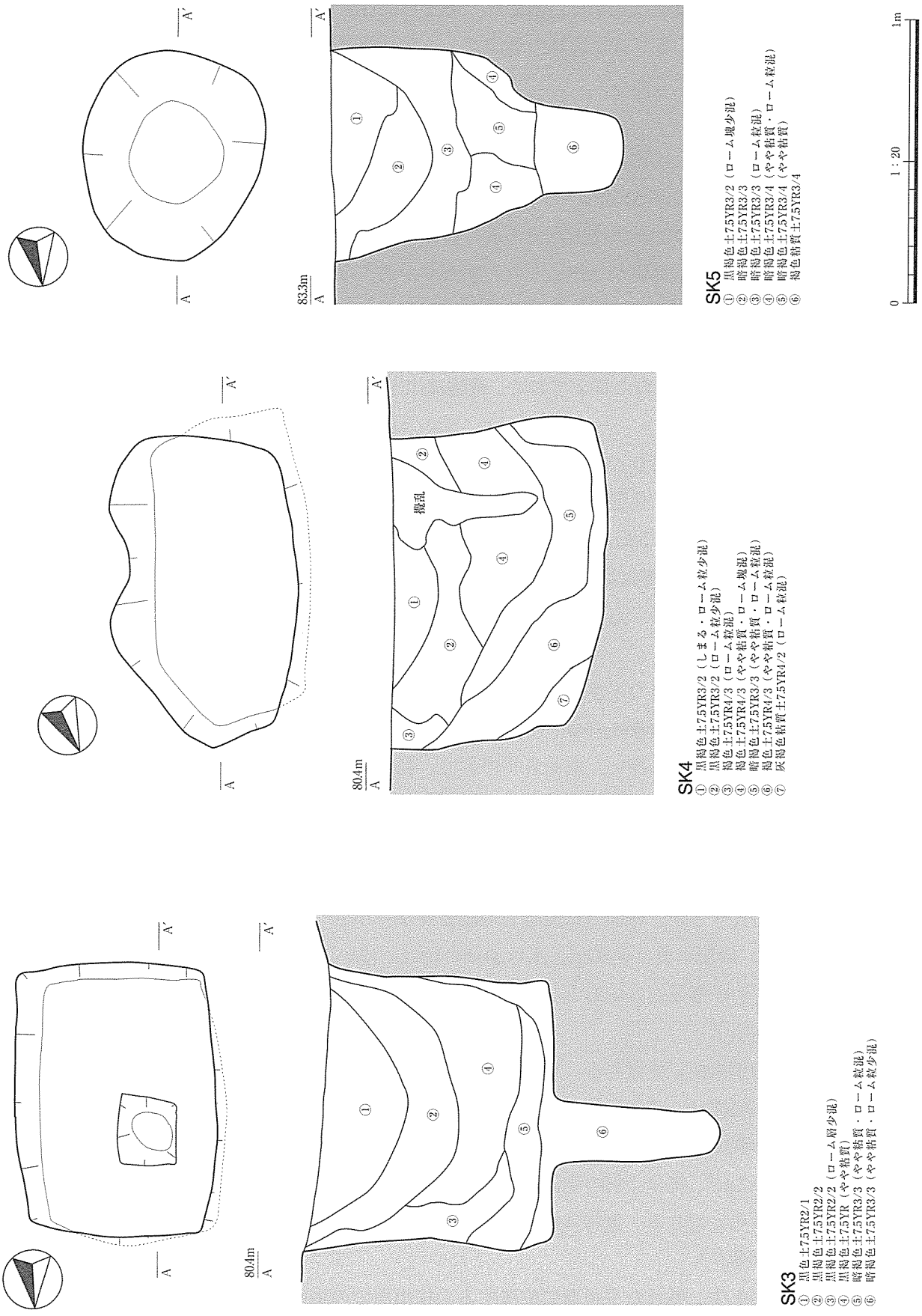
SK1

① 黒色土7.5YR2/1（しまる）
② 黒色土7.5YR2/1（ローム粒少混）
③ 黒褐色土7.5YR3/3（ローム粒混）
④ 黒褐色土7.5YR2/2
⑤ 黒褐色土7.5YR2/2（ローム塊混）
⑥ 黒褐色土7.5YR2/2（ローム粒少混）
⑦ 黒褐色土7.5YR3/2（やや粘質・ローム粒混）

SK2

① 黒色土7.5YR2/1
② 黒色土7.5YR2/1（硬くしまる）
③ 黒色土7.5YR2/1（ローム塊少混）
④ 黒褐色土2/2（やや粘質）
⑤ 暗褐色土3/3（ローム塊混）
⑥ 褐色土4/3（やや粘質ローム粒混）
⑦ 黒褐色土3/2（ローム塊混）
⑧ 黒褐色土3/2（ローム塊少混）
⑨ 黒褐色土3/2（ローム粒混やや粘質）
⑩ 黒褐色土2/2（ローム粒混やや粘質）
⑪ 黒褐色土2/2（ローム粒混粘質）
⑫ 暗褐色土3/3（ローム塊混やや粘質）

第８図　ＳＫ１、２および出土遺物


A
A'
80.4m
SK3
① 黒色土7.5YR2/1
② 黒褐色土7.5YR2/2
③ 黒褐色土7.5YR2/2（ローム層少混）
④ 黒褐色土7.5YR（やや粘質）
⑤ 暗褐色土7.5YR3/3（やや粘質・ローム粒混）
⑥ 暗褐色土7.5YR3/3（やや粘質・ローム粒少混）
80.4m
SK4
① 黒褐色土7.5YR3/2（しまる・ローム粒少混）
② 黒褐色土7.5YR3/2（ローム粒少混）
③ 褐色土7.5YR4/3（ローム粒混）
④ 褐色土7.5YR4/3（やや粘質・ローム塊混）
⑤ 暗褐色土7.5YR3/3（やや粘質・ローム粒混）
⑥ 褐色土7.5YR4/3（やや粘質・ローム粒混）
⑦ 灰褐色粘質土7.5YR4/2（ローム粒混）
撹乱
83.3m
SK5
① 黒褐色土7.5YR3/2（ローム塊少混）
② 暗褐色土7.5YR3/3
③ 暗褐色土7.5YR3/3（ローム粒混）
④ 暗褐色土7.5YR3/4（やや粘質・ローム粒混）
⑤ 暗褐色土7.5YR3/4（やや粘質）
⑥ 褐色粘質土7.5YR3/4
0
1:20
1m

第９図　ＳＫ３、４、５

で、底面も100cm×50cmの不整長方形である。検出面・底面ともに大きさと形に大差がないことからすると、もともと粗雑に掘られたもののようである。深さは74cmを測り、底面ピットをもたない。粗雑なつくりと底面ピットがないことから、未完成である可能性もある。

遺物は出土していないが、ＳＫ３と同様の理由で、ＳＫ２及びＳＫ３と一群を形成するものと考えられる。縄文時代の落とし穴であろう。

ＳＫ５（第９図、図版７）

東丘陵部尾根上の平坦面上に位置する。平面形は長径75cm短径65cmの楕円形を呈する。明瞭な底面ピットはないが、検出面から深さ61cmのところから、断面形は漏斗状につぼまり、さらに深さ32cmを測る。最深部は長径37cm短径33cmの楕円形である。断面では、杭痕跡等は確認できなかった。この形態では杭を据えるためには詰め物が主体になり、据わりが悪くなるだろう。むしろ、獲物が足を取られて逃げにくくするための工夫と解釈するほうが適切であろうか。

ＳＫ６～ＳＫ10の一群に属する可能性もあるが、少し距離が離れていて独特の内部構造をもつことから、単独か別の群に属するものと捉えておく。遺物は出土していない。時期不明の落とし穴である。

ＳＫ６（第10図、図版７）

東丘陵部尾根上の平坦面にあり、平面形は長径92cm×短径58cmの長楕円形を呈する。検出面からの深さは60cmを測る。尾根筋上に位置するためであろうか、埋土の状況から、上部はかなり失われていると考えられる。底面は70cm×52cmの長楕円形で、底面中央を少し外れたところに、径20cm深さ32cmの底面ピットを１つもつ。杭痕跡は確認できない。底面ピットと土坑底面の埋土が同一なので、杭は抜き取られているかもしれない。遺物は出土していない。時期不明の落とし穴である。

ＳＫ７（第10図、図版７）

東丘陵部の尾根筋を少し外れた平坦面上に位置する。上部をウド栽培の溝により一部破壊されている。検出面では長径86cm×短径65cmの楕円形で、検出面からの深さ104cmを測る。今回調査した落とし穴の中では、径に対して最も深い。底面も楕円形で、長径54cm、短径41cmを測り、中央に径20cm深さ22cmの底面ピット１基をもつ。遺物は出土していない。時期不明の落とし穴である。

ＳＫ８（第10図、図版７）

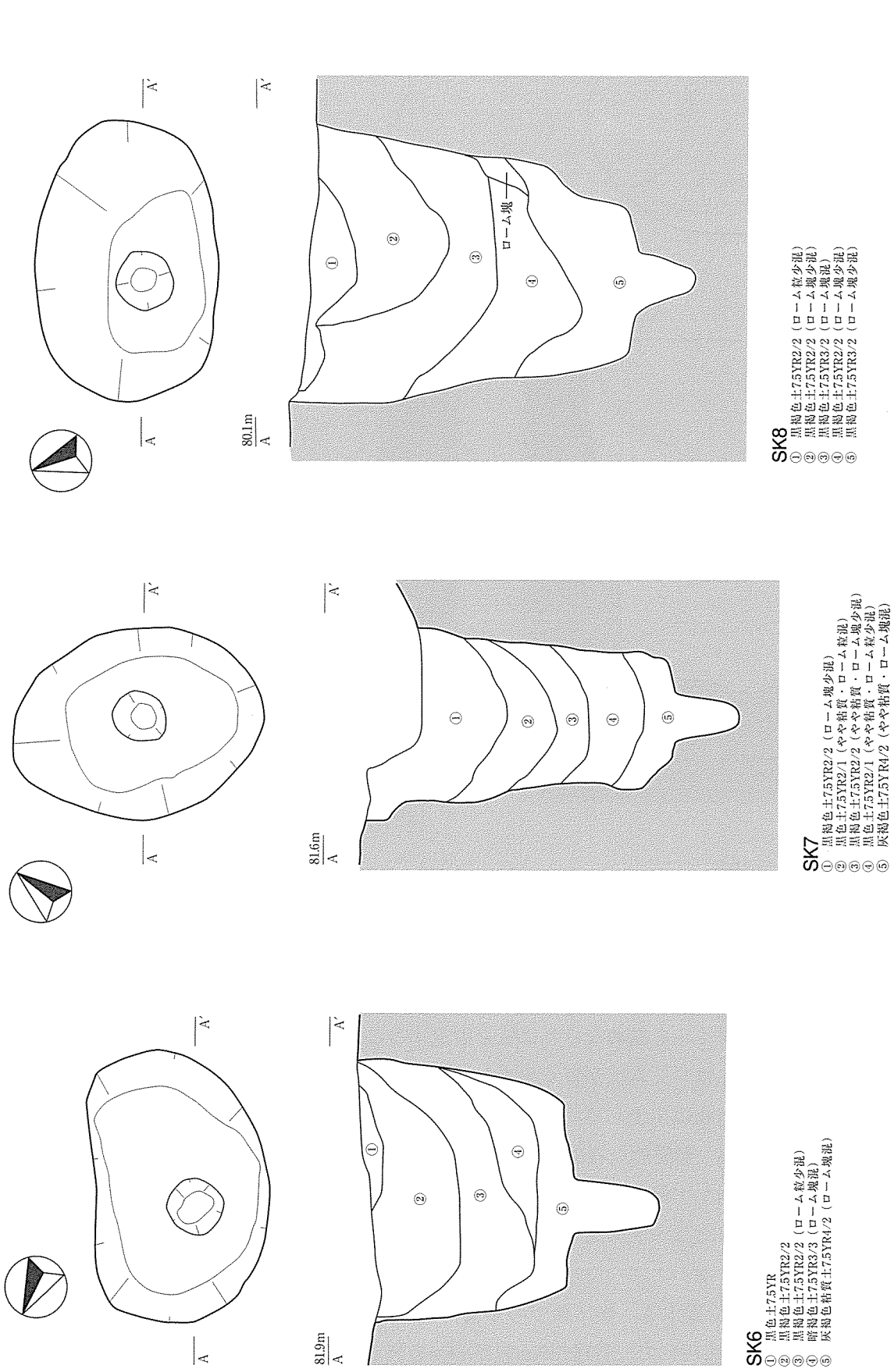
東丘陵部の尾根筋を少し外れた平坦面に掘られている。検出面・底面とも長楕円形であるが、検出面では95cm×64cmの大きさが、底面では52cm×32cmとかなり小さくなり、断面形は逆台形を呈する。深さは109cmを測る。底面中央に径20cm、深さ20cmの比較的浅い底面ピットを１つもつ。遺物は出土していない。時期不明の落とし穴である。

ＳＫ９（第11図、図版７）

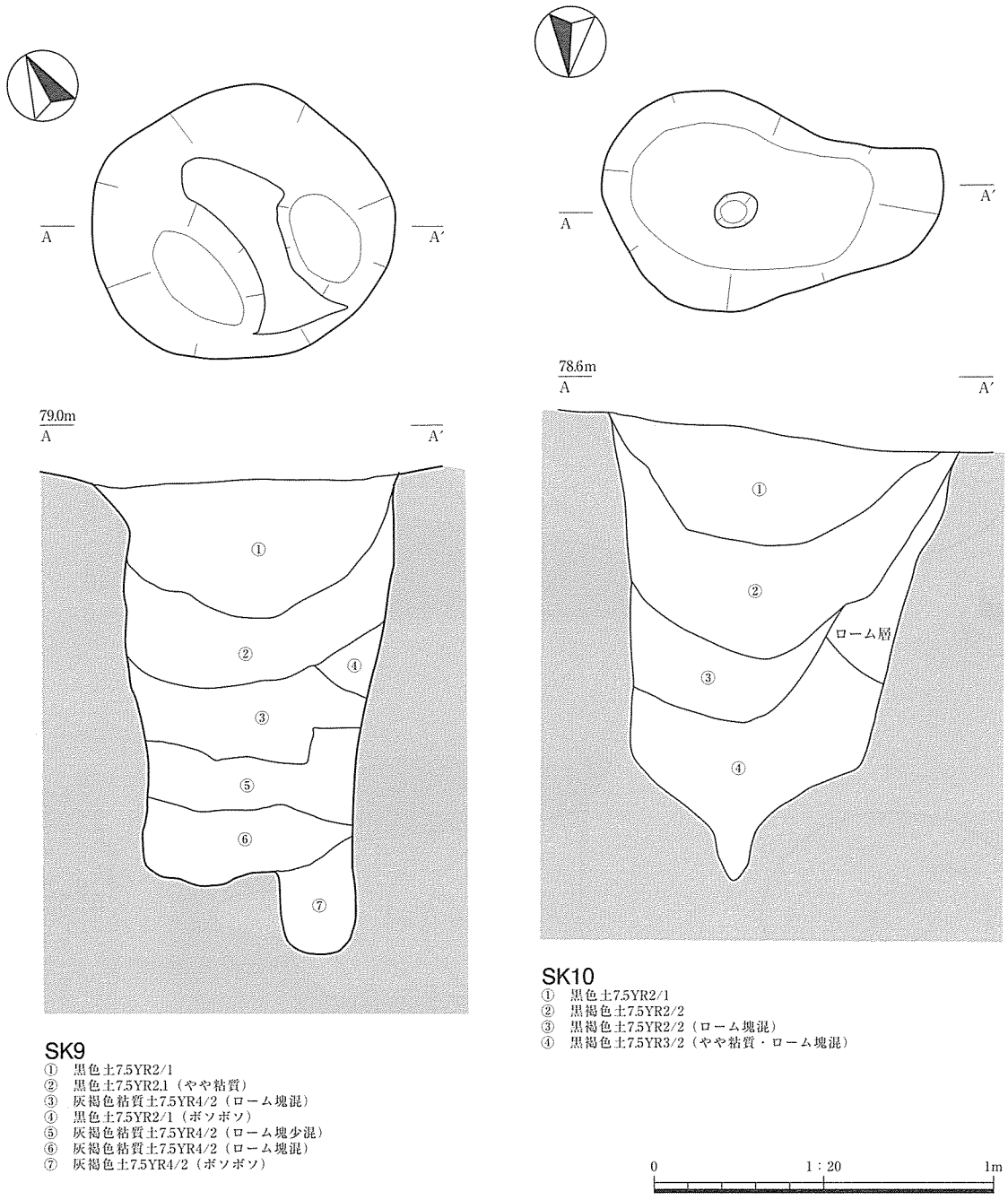
東丘陵部尾根上の平坦面に位置する。検出面での平面形はほぼ円形で、径90cm×83cm、検出面からの深さ83cmを測る。底面は、直径59cmの円形を呈する。底面には、壁面にほぼ接して、２つの大きな底面ピットが設けられており、それぞれ、37cm×17cm深さ32cmと、29cm×19cm深さ32cmを測る。杭痕跡は確認できなかったが、杭は土坑の壁面から離して据える必要があり、そのために底面ピットが大きく作られていると考えられる。遺物は出土していない。時期不明の落とし穴である。

ＳＫ10（第11図、図版７）

東丘陵部の尾根筋を少し外れた平坦面に位置する。検出面での平面形は長径100cm×短径64cmの不整な長楕円形で、深さ114cmを測る。底面は、長径72cm短径42cmの長楕円形を呈する。底面中央に、径14cm深さ16cmの小さく浅い底面ピットが１基ある。底面は平坦ではなくすり鉢状で、底面ピットが


A
A'
81.9m
①
②
③
④
⑤
SK6
① 黒色土7.5YR
② 黒褐色土7.5YR2/2
③ 黒褐色土7.5YR2/2（ローム粒少混）
④ 暗褐色土7.5YR3/3（ローム塊混）
⑤ 灰褐色粘質土7.5YR4/2（ローム塊混）
81.6m
SK7
① 黒褐色土7.5YR2/2（ローム塊少混）
② 黒色土7.5YR2/1（やや粘質・ローム粒混）
③ 黒褐色土7.5YR2/2（やや粘質・ローム塊少混）
④ 黒色土7.5YR2/1（やや粘質・ローム粒少混）
⑤ 灰褐色土7.5YR4/2（やや粘質・ローム塊混）
80.1m
ローム塊
SK8
① 黒褐色土7.5YR2/2（ローム粒少混）
② 黒褐色土7.5YR2/2（ローム塊少混）
③ 黒褐色土7.5YR3/2（ローム塊混）
④ 黒褐色土7.5YR2/2（ローム塊少混）
⑤ 黒褐色土7.5YR3/2（ローム塊少混）
0
1:20
1m

第10図　ＳＫ６、７、８



第11図　ＳＫ９、10

浅いこともあり、底面に厚く土を詰めなければ杭を固定することは難しいかもしれない。しかしながら、土坑底面近くの埋土にはローム塊が多く含まれているものの、はっきりと土を詰めた状況も杭痕跡も確認できなかった。遺物は出土していない。時期不明の落とし穴である。

ＳＫ６からＳＫ10までは、形態的な特徴が類似している。多くは、平面が長楕円形または楕円形で、径が比較的小さく、径に対して深さがある。さらに、尾根筋を少し外れた場所に直線的に分布するという場所選びの共通性とまとまりを考え合わせると、一群を形成するものと考えられる。

ＳＫ11（第13図、図版１、８）

谷部中程の急斜面上に位置する。検出面での平面形は長楕円形で長径160cm×短径125cm、深さは119cmを測る。底面形も長楕円形で、長径137cm短径89cmを測る。比較的大きな落とし穴である。底面中央に、直径20cm深さ44cmの底面ピットを１つもつ。土層断面を観察すると、明瞭な杭痕跡は確認できないものの、杭は１本のようであり、少なくとも埋没開始後のある期間までは抜き取られなかった

ようである。落とし穴の規模に対し、杭が１本だけというのは不十分に思えるが、大型の動物を対象としたものならば理解できるだろうか。遺物は出土していないので、時期は不明である。

ＳＫ12（第12図、図版８）

谷部中程の急斜面上に位置する。検出面での平面形は、長径132cm短径117cmの楕円形を呈し、深さは68cmである。大きさに比較して浅いのは、谷部に位置するため上部を浸食で失っているからであろう。底面は長径107cm短径98cmでほぼ円形で平坦である。底面中央に、径21cm×17cm、深さ34cmの底面ピット１基をもつ。土層断面の観察から分かるのは、ＳＫ11と同様に、杭は１本のようであり、少なくとも杭の根の部分は抜き取られていないようである。遺物は出土していないが、立地と大きさや形態が良く似ているので、ＳＫ11と同時期のものと考えてよさそうである。

ＳＫ13（第12図、図版８）

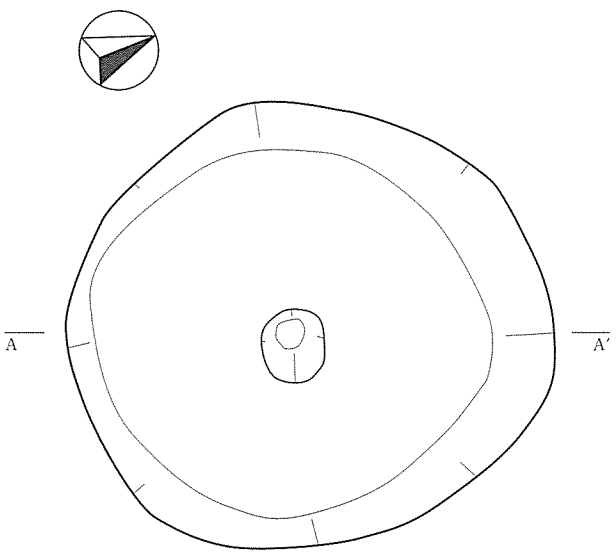
南丘陵部尾根上の緩斜面にあり、一部が調査地外にかかる。検出面での平面形は長楕円形で、長径126cm以上×短径120cm、深さ125cmを測る。底面も長楕円形で長径72cm以上×短径80cmである。底面ピットは底面中央に１つあり、平面形は楕円形を呈する。二重の構造で、上部は径34cm×26cm深さ30cm、下部は径９cm深さ28cmを測る。土層を観察すると、底面ピット下部の埋土は土坑埋土の下部にまで、ほぼ同じ径を保って続いているので、地面に直接打ち込んだ１本の杭の痕跡が残っていると考えられる。底面ピット上部には杭を固定するための石や粘土等は確認できなかった。

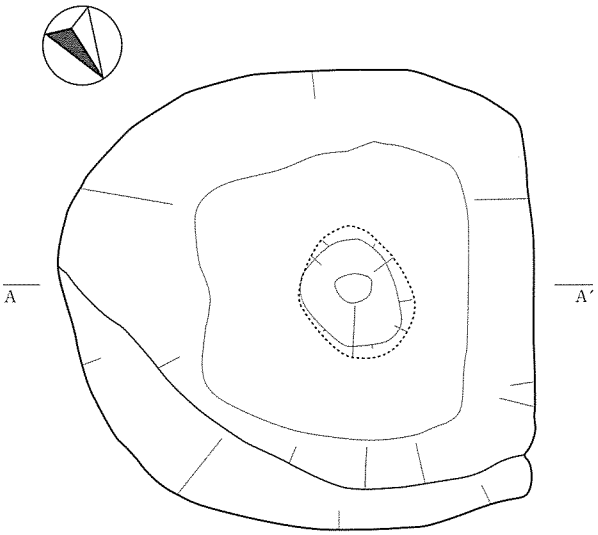
埋土から、土器の細片が１点出土している。胎土に砂粒を多く含み、焼成は悪く脆い。風化のため表面の文様や調整は不明だが、縄文土器のようである。立地は異なるものの、形態や大きさなどからＳＫ11及び12と一群をなす可能性がある。

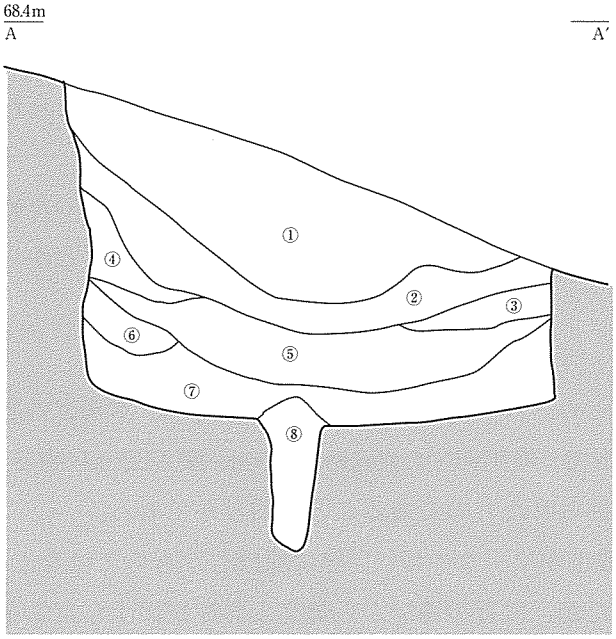
ＳＫ14（第13図、図版８）

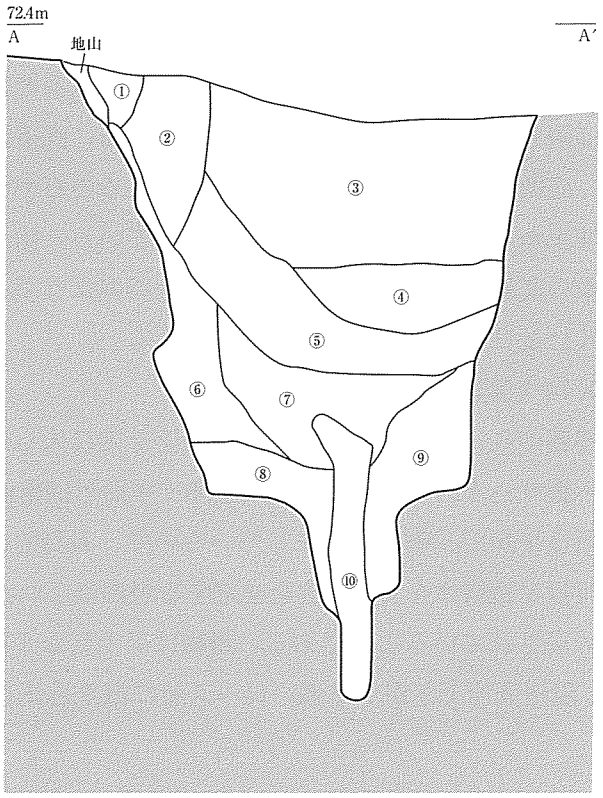
谷部の底に位置する。全体がトレンチ内に入ったため、ローム層上面での検出となり、本来どの層から掘り込まれたものか不明である。平面形は楕円形で、検出面での径63cm×50cm、深さ22cmを測る。底面は平坦で、整った形をしているので、人為的に掘られたものであることは明らかである。

付近に遺構はなく、機能を推定する根拠はない。埋土が単一なので、自然に埋没したものではなく、埋め戻されているようである。遺物は出土しなかったが、付近のⅧ層から縄文土器片が出土したことと、現地表面よりかなり深いローム層に掘り込まれていることから、縄文時代に属する可能性がある。







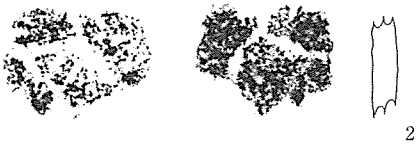


SK12

① 黒褐色土7.5YR2/2（やや粘質・ローム塊少混）
② 黒褐色土7.5YR2/2
③ 黒褐色土7.5YR2/2（ローム粒少混）
④ 灰褐色土7.5YR4/2（やや粘質・ローム粒混）
⑤ 黒褐色土7.5YR2/2（やや粘質）
⑥ 灰褐色土7.5YR4/2（やや粘質・ローム粒混）
⑦ 黒褐色土7.5YR2/2（やや粘質）
⑧ 黒色土7.5YR2/1（やや粘質・砂粒少混）

SK13

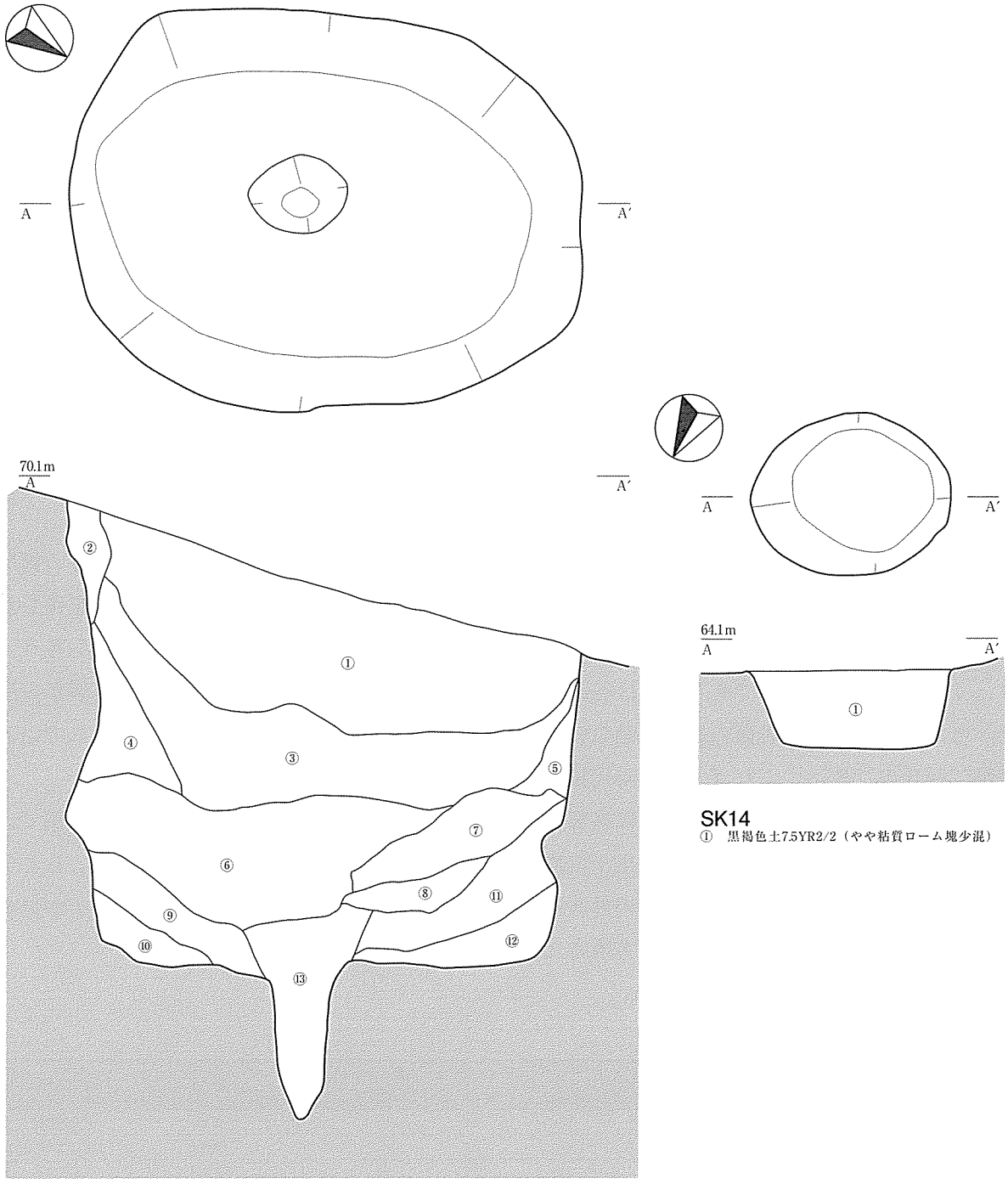
① 攪乱
② 黒色土7.5YR2/1
③ 黒褐色土7.5YR2/2
④ 黒褐色土7.5YR2/2（やや粘質・ローム塊少混）
⑤ 黒褐色土7.5YR2/2
⑥ 黒褐色土7.5YR2/2（ローム粒混）
⑦ 黒褐色土7.5YR2/2（やや粘質・ローム粒少混）
⑧ 黒褐色土7.5YR3/2（やや粘質・ローム粒混）
⑨ 黒褐色土7.5YR3/2（やや粘質）
⑩ 暗褐色土7.5YR3/3



0　2：3　5cm

0　1：20　1m

第12図　ＳＫ12、ＳＫ13および出土遺物



SK14
① 黒褐色土7.5YR2/2（やや粘質ローム塊少混）

SK11
① 黒褐色土7.5YR3/2（しまる・ローム粒少混）
② 暗褐色土7.5YR3/3（ボソボソ・ローム塊混）
③ 黒褐色土7.5YR3/2（やや粘質・ローム塊少混）
④ 黒褐色土7.5YR3/2（ローム粒少混）
⑤ 暗褐色土7.5YR3/3（ローム粒少混）
⑥ 灰褐色粘質土7.5YR4/2（ローム塊少混）
⑦ 暗褐色土7.5YR3/3（やや粘質・ローム塊少混）
⑧ 灰褐色粘質土7.5YR4/2（ローム粒少混）
⑨ 暗褐色粘質土7.5YR3/3（ローム塊少混）
⑩ 灰褐色粘質土7.5YR4/2（ローム塊混）
⑪ 暗褐色土7.5YR3/3（やや粘質・ローム粒少混）
⑫ 灰褐色粘質土7.5YR4/2（ローム粒混）
⑬ 灰褐色土7.5YR4/2（ボソボソ・砂粒混）

0　1：20　1m

第13図　ＳＫ11、14

遺構外の遺物（第14図、図版９）

遺構外からは、石器２点と土器細片５点が出土したに過ぎない。

Ｓ２は、黒曜石製の二次加工ある剥片である。東丘陵部尾根上から出土した。出土層準は、Ｖ層のソフトローム上面であるが、付近では木の根による撹乱でⅣ層までが失われていたため、本来どの層に含まれていたものかは不明である。素材は、末端が反転事故を起こして蝶番状剥離となる剥片である。素材の打面部と右側縁部を、ナイフ形石器の背部整形に類似した、連続する背面側からの急角度な調整で除去する。素材剥片の左側縁上半は本来鋭縁であったはずであるが、主に主剥離面からの微細で角度の低い加工がほぼ全体にわたって連続しているため、ナイフ形石器に分類することはできない。しかし、この左側縁上半の調整を、刃縁を再刃付けしたものと捉えるならば、本来はナイフ形石器であったと考えることも可能かもしれない。その場合には一側縁加工のナイフ形石器ということになるが、左側縁基部側は素材の蝶番状剥離の部分にあたりもともと鈍いため、刃縁は上半にしかないことになる。風化の程度は強くはないものの、製作技術および形態的には旧石器時代に属する可能性がある石器である。

Ｓ３は、サヌカイト製の石鏃である。谷部の上方、東丘陵部との境界付近で出土した。薄い剥片を素材とし、表裏面とも素材面を多く残して周辺だけを押圧剥離で調整する。素材のねじれを残したままの雑なつくりである。先端は舌状部を伴って折損している。使用によって欠けたものであろう。

３、４は縄文土器の細片である。３は谷部トレンチの掘削中にⅧ層から、４は谷部のⅦ層から出土した。ともに風化による表面の剥落が激しいが、外面には細かな縄文が間隔をあけて施されている。久保穣二朗氏のご教示によれば、縄文時代後期頃のもののようである。

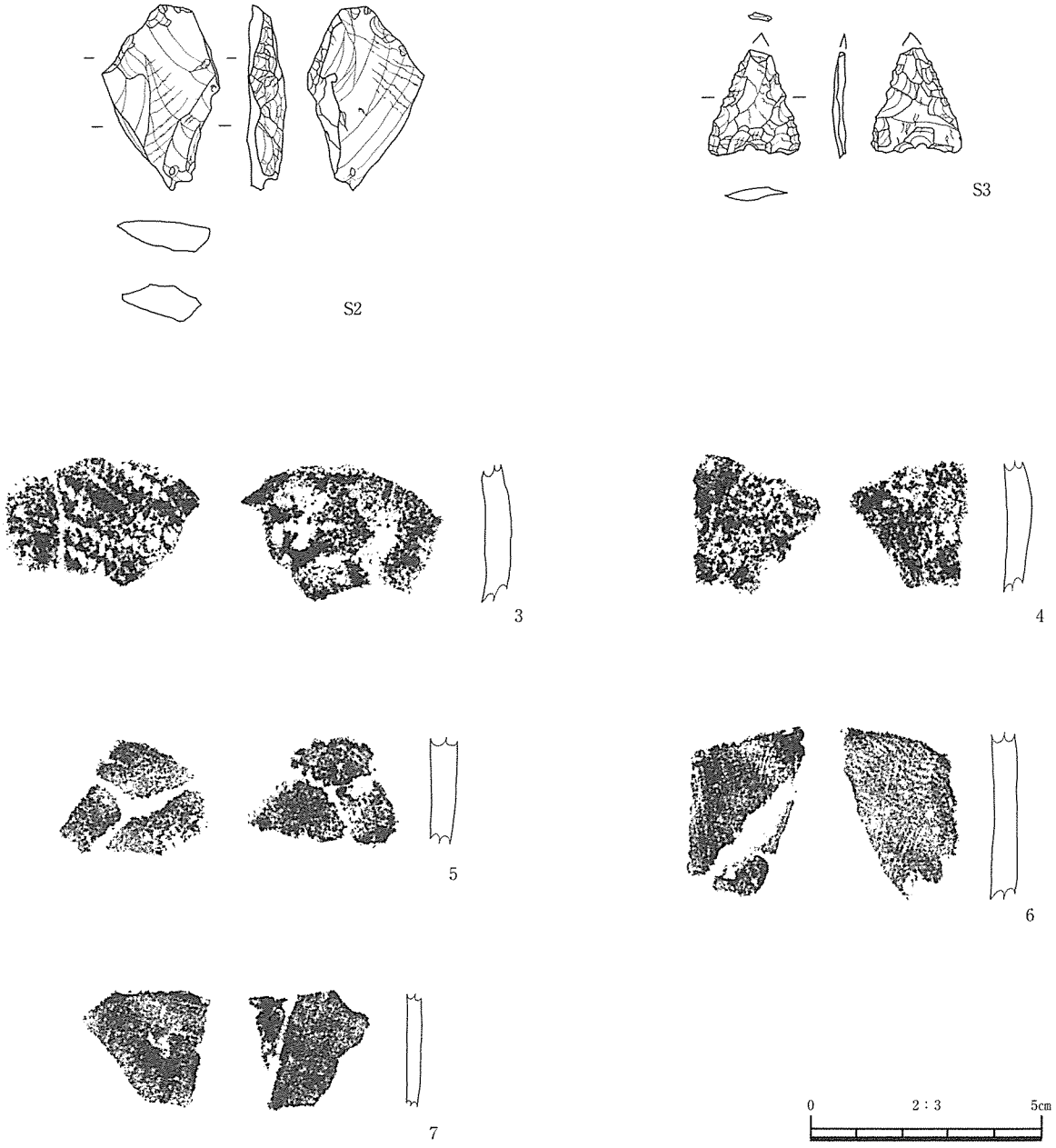
５、６、７は土器の細片である。５は谷部Ⅶ層から出土した。表面の調整は磨耗のため不明で、胎土と焼成から土師器のようであるが、出土位置および層準からは縄文土器の可能性がある。６と７は南丘陵部Ⅲ層からの出土である。６は内外面にハケ目が、７は外面にミガキがと内面にナデが見られる。６と７は、調整や胎土などから、古墳時代の土師器と思われる。

第１表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	遺構出土地点	層位	型式	法量 長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
Ｓ１	8	ＳＫ２	埋土	石鏃	26.6	18.2	3.4	1.3	鉄石英	先端部欠損
Ｓ２	14	Ｅ10	Ｖ層上面	二次加工ある剥片	39.5	24.7	8.3	6.1	黒曜石	ナイフ形石器の可能性有
Ｓ３	14	Ｃ５	Ⅲ層	石鏃	22.9	19.5	2.6	1.1	サヌカイト	先端部欠損

第２表　土器観察表

遺物番号	挿図番号	遺構 層位	種別 器種	文様・調整	胎土 焼成	色調	備考
1	8	ＳＫ１ 埋土	土師器 不明	内外面とも不明	密 良好	にぶい褐色	
2	12	ＳＫ13 埋土	縄文土器？ 不明	内外面とも不明	2㎜の砂粒を多く含む やや不良	にぶい黄褐色	
3	14	Ｂ３ Ⅷ層	縄文土器 不明	外面：間隔の広い細かな縄文 内面：不明	1㎜の砂粒を含む 良好	にぶい黄褐色	
4	14	Ｂ３ Ⅶ層	縄文土器 不明	外面：間隔の広い細かな縄文 内面：不明	密 良好	にぶい黄橙色	
5	14	Ｂ３ Ⅶ層	土師器？ 不明	内外面とも不明	1㎜の砂粒を含む 良好	明黄褐色	
6	14	Ｄ２ Ⅲ層	土師器 不明	内外面ともハケ目	密 良好	にぶい黄橙色	
7	14	Ｅ１ Ⅲ層	土師器 不明	外面：ミガキ 内面：ナデ	密 良好	にぶい褐色	



第14図　遺構外出土遺物

第４章　ま　と　め

坂長下門前遺跡の落とし穴の分布は非常に散漫である。しかし、裏を返せば、最良の箇所を選んでいる可能性が高く、落とし穴猟に関する情報を簡潔に引き出すことができるかもしれない。

落とし穴の多くが、尾根筋を少し外れた場所に設けられているのは興味深い。この点については少なくとも２通りの解釈ができるだろう。一つ目は、動物が足を止めるか通りやすい位置を選んでいるという解釈である。動物は、尾根筋から下る時にも、谷底から上る時にも、その先の状況を視認するには、傾斜変換点の付近で歩を緩めるだろう。見方を変えれば、谷底と尾根筋の両方を見通しながら移動するためには、傾斜変換点付近を通るのが最も安全であることになる。東丘陵部の落とし穴群の位置は、この解釈を支持するかもしれない。東丘陵部の東側調査区外には急な谷が南北に走り、この谷に面して、落とし穴は直線上に配置されている。一方、比較的傾斜が緩やかな東丘陵部西側には、落とし穴は全く掘られていない。これは、どこを通っても見通しがきくため、動物の通り道を限定しにくいことが理由であるかもしれない。二つ目の解釈は、落とし穴に人間が落ちることを避けているということである。通常人間は平坦で歩きやすいところを通る。丘陵であれば稜線上が、谷であれば谷底が通り道になることが多い。落とし穴の多くは、掘った者以外にとっては、非常に危険で分かりづらいものであったであろう。事故を防ぐためには、人間がよく通る付近を避けて配置する必要がある。谷部の２つの落とし穴が谷底を外して設けられているのは、この点で示唆的である。

坂長下門前遺跡の落とし穴は、規模や形、立地をもとに少なくとも３群に分けられる。（第３表）

１群：東丘陵部東側肩部　ＳＫ２、ＳＫ３、ＳＫ４

２群：東丘陵部尾根筋東側　ＳＫ６、ＳＫ７、ＳＫ８、ＳＫ９、ＳＫ10

３群：谷部～南丘陵部北側　ＳＫ11、ＳＫ12、ＳＫ13

大きさから考えると、１群と２群は中型以下の動物の捕獲を目的としたものと考えられる。また、上記の理由から、１、２群は動物の移動経路を選んで掘られており、純粋な狩猟用であろう。一方、３群の性格は少し異なっていたと思われる。中型か大型の動物を対象とし、動物の通り道を想定しにくい急な谷の中ほどを中心に選んでいることからすると、下方にあるものを害獣から守る機能が加えられている可能性がある。この谷の下方には、縄文時代晩期には集落（坂長第８遺跡）があり、近年まで泉があった。谷の中に等間隔に配列された大型の落とし穴は、集落や水場を守る防衛線であったのかもしれない。

第３表　落とし穴一覧表

	群	検出面（cm）			底面（cm）			深さ（cm）	底面ピット（cm）			位置	備考
		形態	長軸	短軸	形態	長軸	短軸		数	径	深さ		
ＳＫ２	1	長楕円形	130	85	長方形	108	57	91	3	5	15	東丘陵部平坦面	石鏃出土
ＳＫ３	1	長方形	98	62	長方形	86	54	82	1	25×20	60	東丘陵部肩部	
ＳＫ４	1	長方形	104	59	長方形	100	50	74	0			東丘陵部肩部	
ＳＫ５		楕円形	75	65	円形	37	33	93	0			東丘陵部平坦面	
ＳＫ６	2	長楕円形	92	58	長楕円形	70	52	60	1	20	32	東丘陵部緩斜面	
ＳＫ７	2	長楕円形	86	65	長楕円形	54	41	104	1	20	22	東丘陵部緩斜面	
ＳＫ８	2	長楕円形	95	64	長楕円形	52	32	109	1	20	20	東丘陵部緩斜面	
ＳＫ９	2	円形	90	83	円形	59	59	83	2	37×17 29×19	32 32	東丘陵部緩斜面	
ＳＫ10	2	長楕円形	100	64	長楕円形	72	42	114	1	14	16	東丘陵部緩斜面	
ＳＫ11	3	長楕円形	160	125	長楕円形	137	89	119	1	20	44	谷部斜面	
ＳＫ12	3	楕円形	132	117	円形	107	98	68	1	21×17	34	谷部斜面	
ＳＫ13	3	長楕円形	126<	120	長楕円形	72<	80	125	1	34×26	58	南丘陵部肩部	土器片出土

図　版
PLATE

ＳＫ11埋土堆積状況（東から）

図版２

調査地全景（東南東から）

１．調査地周辺の地形（１）
（南東から）

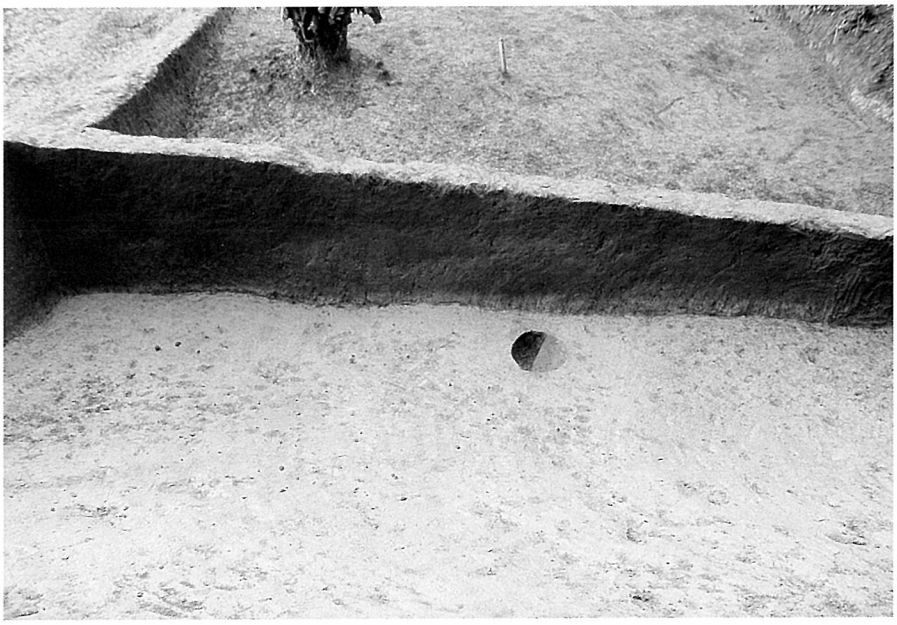
２．調査地周辺の地形（２）（上が北）

図版４

１．調査地全景（１）
（北東から）

２．調査地全景（２）（上が北）

１．谷部土層堆積状況（１）
（南西から）

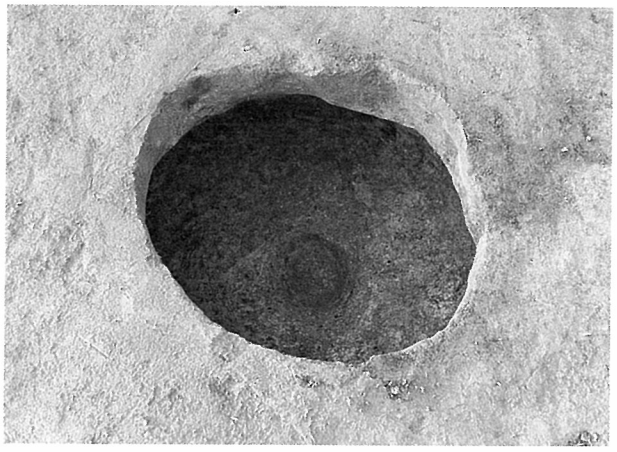


２．谷部土層堆積状況（２）
（北東から）

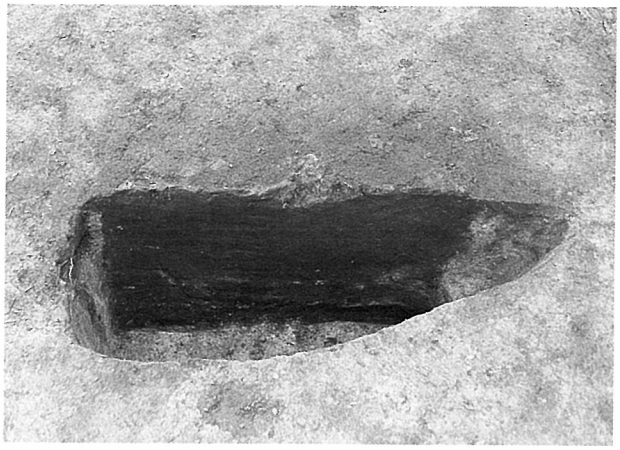
３．谷部土層堆積状況（３）
（南東から）

図版６

１．ＳＫ１埋土堆積状況（北西から）



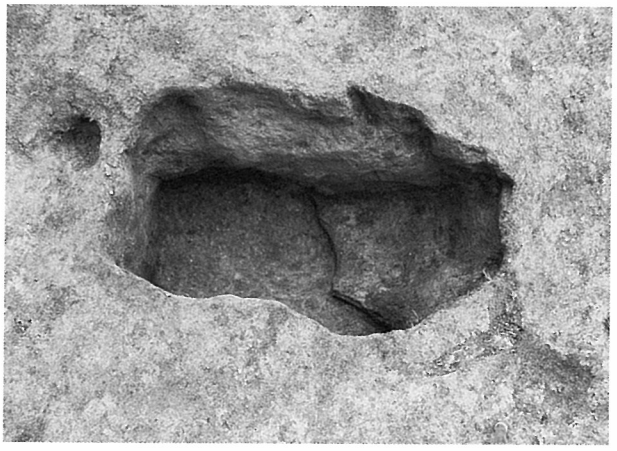
２．ＳＫ１完掘状況（北西から）



３．ＳＫ２埋土堆積状況（西から）

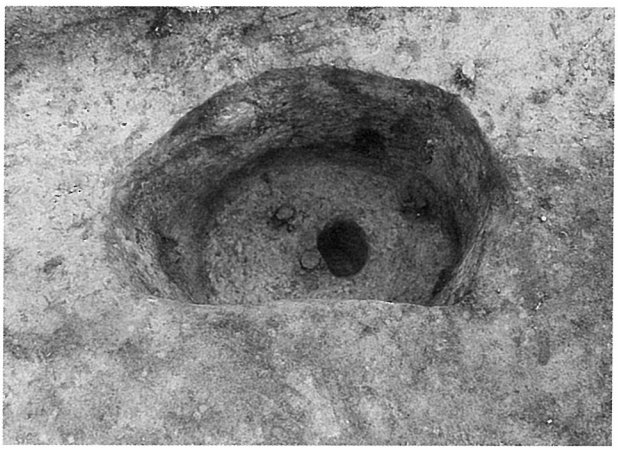
４．ＳＫ２完掘状況（東から）

５．ＳＫ３完掘状況（東から）



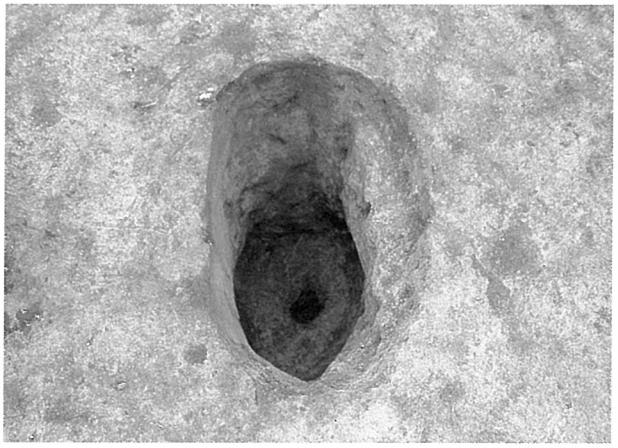
６．ＳＫ４完掘状況（東から）

１．ＳＫ５完掘状況（東から）



２．ＳＫ６完掘状況（東から）

３．ＳＫ７完掘状況（北東から）

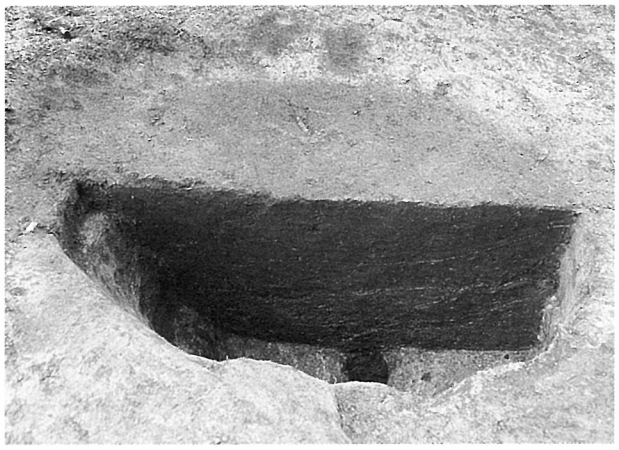


４．ＳＫ８完掘状況（東から）

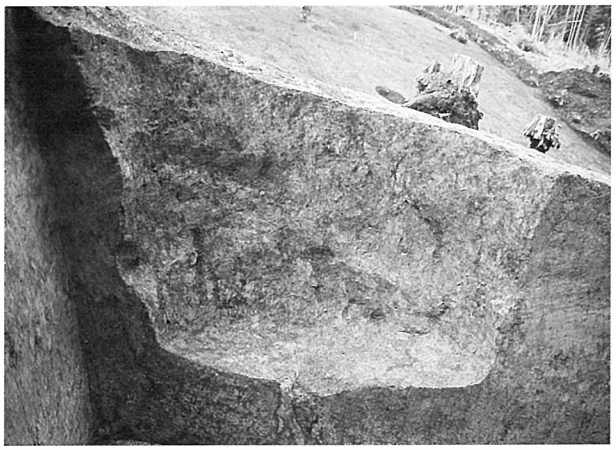
５．ＳＫ９完掘状況（南から）

６．ＳＫ10完掘状況（西から）

図版８



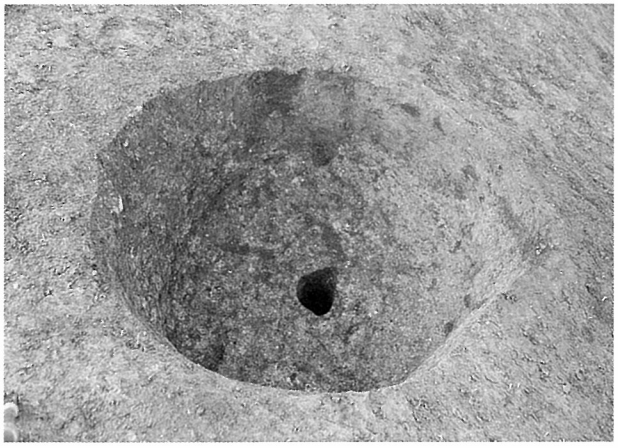
１．ＳＫ11埋土堆積状況（北東から）



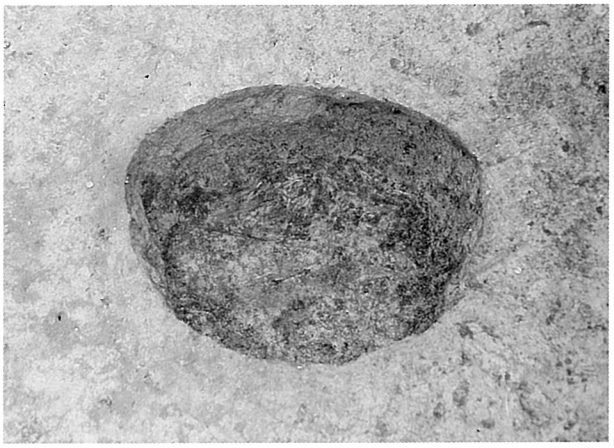
２．ＳＫ11完掘状況（北東から）

３．ＳＫ13埋土堆積状況（南西から）

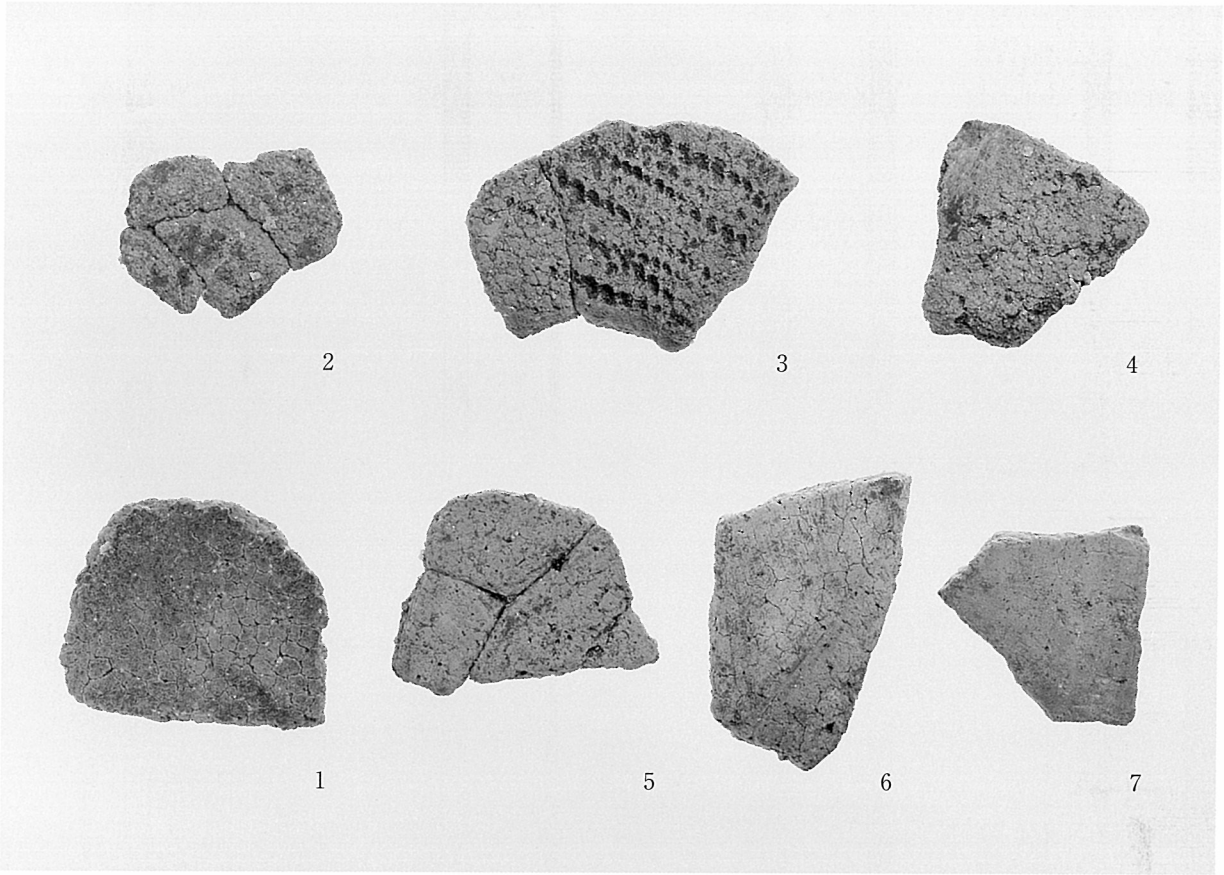
４．ＳＫ13完掘状況（南西から）



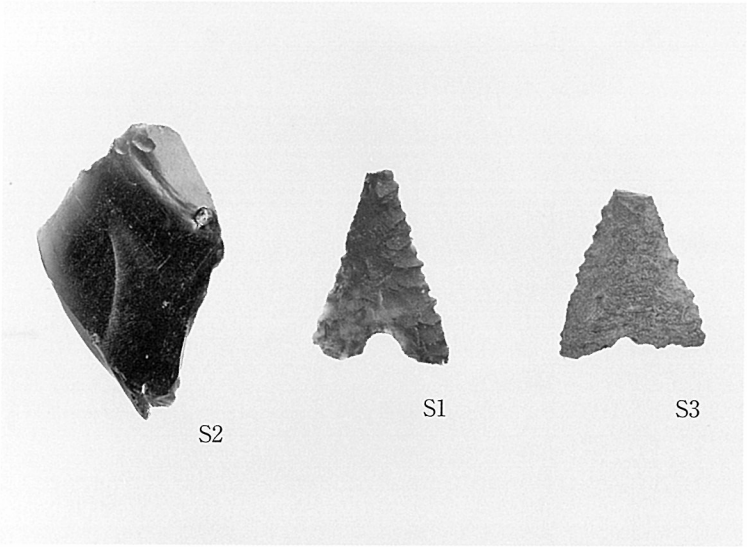
５．ＳＫ12完掘状況（東から）



６．ＳＫ14完掘状況（東南から）



１．縄文土器・土師器



２．石器

報告書抄録

ふりがな	さかちょうしももんぜんいせき
書名	坂長下門前遺跡
副書名	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書
シリーズ番号	109
編著者名	高橋　章司　　祝原　幸治
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団調査室
所在地	〒680-0151　鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地　TEL(0857) 27-6717
発行年月日	西暦2007年（平成19年）12月７日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかちょうしももんぜん 坂長下門前遺跡	とっとりけんさいはくぐんほうきちょうさかちょう 鳥取県西伯郡伯耆町坂長 あざしももんぜん 字下門前2023ほか	31390	1－370	35° 22' 32"	133° 23' 38"	20060914 ～ 20061228	6500㎡	一般国道 181号（岸本バイパス）道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂長下門前遺跡	その他の遺跡	縄文時代ほか	落とし穴　12基	石鏃	
		古墳時代	貯蔵穴　1基	土師器	
		時期不明	土坑　1基		

鳥取県教育文化財団調査報告書　109
一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

鳥取県西伯郡伯耆町

坂長下門前遺跡（さかちょうしもぜんいせき）

発　行　2007年12月７日
編　集　財団法人　鳥取県教育文化財団　調査室
〒680-0151　鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地
電話（0857）27-6717
発行者　財団法人　鳥取県教育文化財団
印　刷　勝美印刷株式会社